

# 多賀城市文化財年報

—令和2年度—

2021年12月

多賀城市埋蔵文化財調査センター



## 序 文

多賀城市埋蔵文化財調査センターは、昭和62年4月の開設以来、市内遺跡の発掘調査、展示や歴史学習を中心とした普及啓発、歴史・民俗資料の収集・保管・公開など、文化財保存活用事業を推進してきました。

平成19年度に開館した埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）では、市内出土資料による通史展示を行うとともに、常時実施している歴史的な体験学習やイベントを通して、市民の皆様の文化財へのより一層の関心と理解が深まる目的として事業を行っております。

本書は、上記施設で実施した事業に加え、指定文化財の保護や多賀城跡復元整備事業など、教育委員会事務局文化財課所管事業の内容も新たに盛り込み、これまでの『多賀城市埋蔵文化財調査センターワン報』から、『多賀城市文化財年報』へとリニューアルしました。本書を通してより一層本市の文化財保存活用事業を広く御理解頂ければ幸いに存じます。

さて、令和2年度は、新型コロナウィルス感染症が世界的に深刻化する中で、当センターにおいても、感染対策の徹底を図るために、展示室の臨時休館、歴史学習イベントの中止や事業縮小などを余儀なくされる1年となりました。

コロナ禍により、特に展示や歴史学習などの普及啓発事業に大きく影響を受ける中で、常設展及び例年事業である速報展や、留ヶ谷・高崎・田中村の歴史を紹介する資料展を開催したほか、多賀城創建1300年に向けた企画として、多賀城碑の歴史的意義を紹介した企画展「多賀城碑が映す古代東北と北方世界」及び関連企画である記念講演会を開催し、文化財に対する保護の意識や、本市の歴史への関心が高まるよう努めてまいりました。

調査につきましては、32件の発掘調査、主に市川・浮島地区の石造物・仏像・神社の奉納物や民俗資料等の歴史遺産調査を行い、地域に眠る貴重な文化財の保護を行いました。

多賀城は令和6年に創建1300年を迎えます。このため、これまでの調査研究成果をもとに、今後とも本市の歴史を市内外に発信し、多くの方が本市の歴史に関心と理解を深められるよう努めていく所存です。

結びに、日頃より当センターの運営につきまして御指導・御協力を頂いております多くの方々に対し、厚く感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

令和3年12月

多賀城市埋蔵文化財調査センター  
所長 伊藤 文昭

## 例　　言

- 1 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが令和2年度に実施した調査、展示、普及啓発事業、資料管理及び教育委員会事務局文化財課が実施した指定文化財保護など各種事業についての概要をまとめたものである。
- 2 本書で使用した遺跡地図は、1/10,000の多賀城市都市計画図（令和2年度版）を複製して作成した。
- 3 本書は小原一成が編集し、執筆者については目次に示した。

## 目　　次

1 調査	
(1) 発掘調査概要	1 (小原)
(2) 周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更	5 (大木丈夫)
(3) 歴史遺産調査概要	6 (早坂優子)
2 展示	
(1) 展示概要	8 (長久保美智)
(2) 常設展	9 (長久保)
(3) 速報展	10 (小原)
(4) 企画展と関連イベント	13 (瀧川ちかこ)
(5) 資料展	20 (早坂)
3 普及啓発活動	
(1) 普及啓発活動概要	23 (長久保)
(2) 歴史学習	24 (長久保)
(3) 遺跡調査報告会	24 (小原)
(4) 歴史講座	25 (早坂)
(5) 刊行物	25 (小原)
(6) 講演会等への協力	25 (小原)
(7) 研究発表・執筆など	25 (小原)
4 指定文化財保護	
(1) 特別史跡多賀城跡附寺跡の保存活用	26 (武田健市)
(2) 多賀城南門等復元整備事業	31 (武田)
(3) 名勝おくのほそ道の風景地の保存活用	35 (武田)
5 資料管理	
(1) 資料の貸出及び掲載	36 (小原)
(2) 資料調査の受け入れ	36 (小原)
(3) 収集（寄贈）資料	36 (小原)
(4) 出土資料の保存処理	36 (小原)
6 事務報告	
(1) 埋蔵文化財調査センター改修事業	37 (大木)
(2) 令和2年度埋蔵文化財調査センター事業費内訳（実績）	38 (小原)
(3) 組織・職員体制	38 (小原)
附章 多賀城南門等復元整備事業の実施設計について	39 (武田)

## 1 調査

### (1) 発掘調査概要

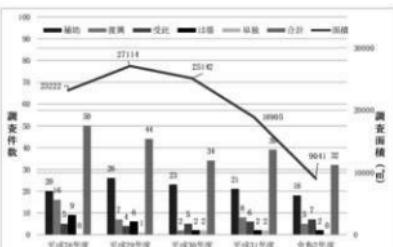
令和2年度の周知の埋蔵文化財包蔵地及び隣接地における文化財保護法に基づく開発協議届出件数は189件あり、法第93条は167件、94条は22件である。このうち、発掘調査に及んだのは32件で、調査面積の合計は約9,031m<sup>2</sup>である。事業種別の内訳は、国庫補助事業が18件、復興交付金事業が5件、受託事業が9件（うち大区画は場整備事業に伴う調査が2件（事業数としては1件））である。調査件数は例年通りに推移しているのに対し、は場整備事業に係る現地発掘調査面積が減少した結果、平成31年度に比べて調査面積合計が減少している。

山王遺跡では7件の発掘調査を実施した。第214次調査では、東西道路跡・掘立柱建物跡・井戸跡等を発見したほか、平仮名と推定される墨書き土器や、仏像の台座の一部の可能性がある蓮弁状の木製品が出土した。第223次調査では、古墳時代から古代の小溝群、古墳時代の水田跡を発見した。第224次調査では、中世の区画溝と方形土坑を発見した。

平成27年度から継続している大区画は場整備事業に伴う調査（山王遺跡第178・198次調査）では、令和2年度に約1,800m<sup>2</sup>の発掘調査を行い、面的整備に対する現地調査を終了した。中部工区の177Tでは、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡を多数発見した。東部工区の178Tでは、南1道路・西3道路の交差点付近を確認したほか、道路と同方向に延びる溝跡や、交差点付近に埋設された土器埋設遺構を発見した。

新田遺跡では、10件の発掘調査を実施した。第140次調査では古代の小溝群を発見した。第142次調査では中世屋敷を区画すると考えられる溝跡を発見した。第148次調査では古墳時代前期の堅穴建物跡を発見した。第149次調査では古墳時代後期の堅穴建物跡と古代の小溝群を発見した。

そのほか、志引遺跡第7次調査では粘板岩片集積遺構、高崎遺跡第124次調査では近代以降の送電線基地に関連すると考えられる遺構を発見した。



過去5カ年度における調査件数と面積の推移



山王遺跡第224次調査 区画溝検出状況



志引遺跡第7次調査 粘板岩片集積遺構検出状況



山王遺跡第 214 次調査 道路側溝掘下げ状況



山王遺跡第 214 次調査 柱穴掘下げ状況



山王遺跡第 214 次調査 小溝群掘下げ状況



山王遺跡第 223 次調査 小溝群掘下げ状況



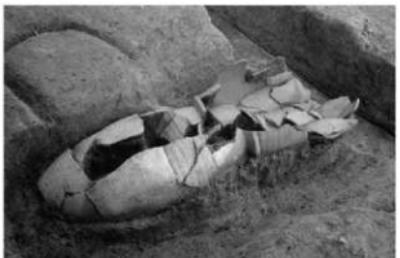
新田遺跡第 140 次調査 造構掘下げ状況



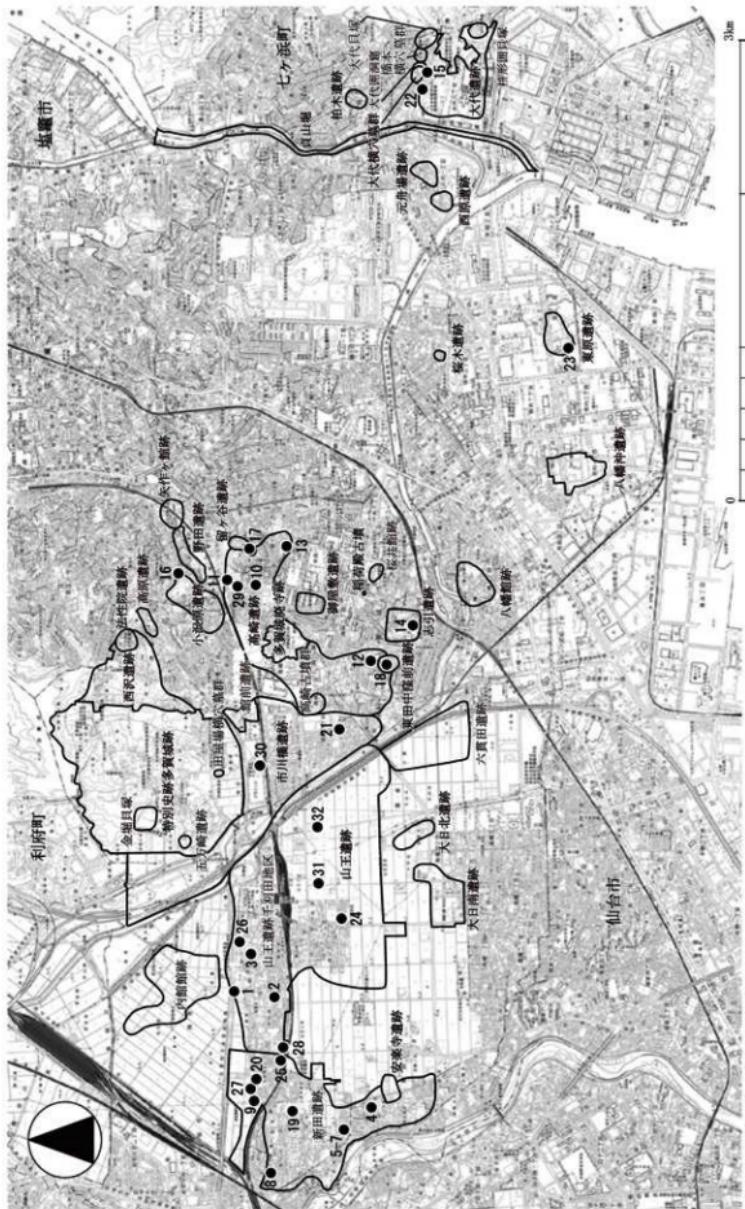
山王遺跡第 178 次調査 捜立柱建物跡掘下げ状況



山王遺跡第 198 次調査 道路跡検出状況



山王遺跡第 198 次調査 土器埋設遺構掘下げ状況



位置の地質調査

表番号は発掘調査一覧表の番号と対応

## 発掘調査一覧

番号	事業	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	主な時代	主な遺構	調査内容	所収文書
1	国 補助	山王遺跡 第221次	南平字寺81番13 令和2年9月3日～5月12日	62㎡	古代。近世	個人住宅建設	溝跡、井戸跡	本塗壁調査 土師器、須恵器、陶磁器	148集
2	国 補助	山王遺跡 第224次	山王字西町80番1 令和2年9月3日～10月11日	180㎡	古代。半葉。近世	個人住宅建設	溝跡、整穴状遺構	本塗壁調査 土師器、陶器	148集
3	国 補助	山王遺跡 第226次	南平字寺61番 令和2年10月30日～12月25日	83㎡	古代。近世以降	個人住宅建設	溝跡、方形遺構、柱穴	本塗壁調査 土師器、須恵器、陶磁器、瓦、木製品、鉄鋤	
4	国 補助	新田遺跡 第145次	新田字北35番4 令和2年7月21日	70㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
5	国 補助	新田遺跡 第145次	新田字北148番4 令和2年9月7日～9月29日	62㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
6	国 補助	新田遺跡 第146次	新田字北45番3、145番5 令和2年9月7日～9月29日	56㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
7	国 補助	新田遺跡 第147次	新田字北45番4 令和2年9月7日～9月29日	66㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
8	国 補助	新田遺跡 第148次	新田字北45番1 令和2年11月2日～11月27日	56㎡	古墳時代。古代	個人住宅建設	聖塚建物跡、小塗群	本塗壁調査 土師器	148集
9	国 補助	新田遺跡 第150次	南平字里塚10番外 令和2年11月7日～11月18日	150㎡	古代	宅地造成工事	溝跡	本塗壁調査 土師器、須恵器	148集
10	国 補助	高崎遺跡 第125次	里ヶ谷一丁目3番5 令和2年9月11日～9月17日	45㎡	時期不明	個人住宅建設	柱穴	本塗壁調査	148集
11	国 補助	高崎遺跡 第126次	里ヶ谷一丁目21番34、26番5 令和2年11月20日～11月27日	187㎡	—	切り土整地工事	—	確認調査	148集
12	国 補助	高崎遺跡 第127次	高崎二丁目144番3 令和2年12月9日～12月25日	24㎡	時期不明	個人住宅建設	溝跡、柱穴	本塗壁調査	
13	国 補助	高崎遺跡 第128次	高崎二丁目36番8 令和2年1月2日	54㎡	—	個人住宅建設	—	本塗壁調査	
14	国 補助	古引遺跡 第7次	東山中一丁目35番2 令和2年1月2日～6月24日	90㎡	古墳時代	個人住宅建設	カツジ状遺構、石製廣告品製作跡	本塗壁調査 土師器、石製廣告品複	148集
15	国 補助	大内遺跡 第6次	大内二丁目28番1 令和2年10月27日	50㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
16	国 補助	小沢原遺跡 第21次	小沢原二丁目19番1の一部 令和2年11月3日～12月25日	239㎡	—	介護施設建設	—	確認調査	
17	国 補助	御ヶ谷遺跡 第10次	御ヶ谷一丁目30番13 令和2年12月7日	12㎡	—	個人住宅建設	—	本塗壁調査	
18	国 補助	東山中遺跡 第9次	東山中一丁目28番2 令和2年12月9日～12月25日	19㎡	—	個人住宅建設	—	本塗壁調査	
19	復興	新田遺跡 第142次	山王字南舟寺1番1 令和2年4月1日～5月1日	112㎡	中世	宅地造成	溝跡	確認調査 土師器、須恵器、陶器	148集
20	復興	新田遺跡 第148次	山王字北寺福寺軒番24 令和2年6月1日～6月23日	69㎡	古墳時代	個人住宅建設	聖塚建物跡、土壤	確認調査 土師器	148集
21	復興	市川塙遺跡 第99次	城南2丁目16-1番外 令和2年6月9日～6月26日	137㎡	—	個人住宅建設	—	確認調査	148集
22	復興	大内遺跡 第5次	大内二丁目27番2番外 令和2年6月14日～10月21日	69㎡	—	宅地造成	—	確認調査	148集
23	復興	東照道跡 第2次	東照3丁目13-1の一部 令和2年7月1日～7月2日	50㎡	—	工事建設	—	確認調査	148集
24	受託	山王遺跡 第214次	山王字山岡16番地 令和2年9月1日～10月10日	1,393㎡	古墳時代。古代	宅地造成	溝跡、聖立柱建物跡、井戸跡、溝跡、小塗跡等	本塗壁調査 土師器、須恵器、木製品	
25	受託	山王遺跡 第222次	山王字二千1番1番外 令和2年6月1日～9月4日	795㎡	63%	宅地造成	溝跡	本塗壁調査 土師器	149集
26	受託	山王遺跡 第223次	南平字伊勢25番外 令和2年9月18日～12月4日	980㎡	古墳時代。古代	宅地造成	溝跡、井戸跡、小塗群、水田跡	本塗壁調査 土師器、須恵器	
27	受託	新田遺跡 第140次	南平字赤28番外 令和2年4月20日～6月30日	1,572㎡	古代	宅地造成	溝跡	本塗壁調査 土師器	149集
28	受託	新田遺跡 第143次	山王字松原1番1番外 令和2年6月10日～9月4日	522㎡	—	宅地造成	—	本塗壁調査	149集
29	受託	高崎遺跡 第124次	里ヶ谷一丁目31番1番外 令和2年6月3日～6月23日	145㎡	古代	宅地造成	逐塗隣基跡	瓦、練瓦	149集
30	受託	市川塙遺跡 第199次	市川字塙前郷内 令和2年7月6日～8月19日	42㎡	古代	公闘施設	土塁、柱穴	本塗壁調査 土師器、須恵器、灰釉陶器	149集
31	注懲	山王遺跡 第178次	山王字山岡16番地 令和2年4月7日～8月31日	1,459㎡	古代	田面造成	聖立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壤	確認調査、本塗壁調査 土師器、須恵器、陶磁器、木製品	
32	注懲	山下遺跡 第196次	市川字多賀町内 令和2年10月9日～12月25日	369㎡	古代	パイプライン敷設	道路跡、聖立柱建物跡、溝跡、土壤	土師器、須恵器、陶磁器、木製品	

## (2) 周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更

山王遺跡第216次調査に伴い、新田遺跡東側隣接地及び山王遺跡南側隣接地に試掘・確認調査を実施した結果、古代の構跡を発見した。この構跡は、山王遺跡が従前の範囲よりも広がっていることを示すものであることから、山王遺跡の範囲を拡大変更した。



変更前の遺跡の範囲



変更後の遺跡の範囲

周知の埋蔵文化財包蔵地の拡大範囲

### (3) 歴史遺産調査概要

#### ①調査に至るまでの経緯

本市では、平成25年度から市内全域を対象として、江戸時代に市域にあった13の村ごとに文化財調査を行っている。この調査によって、これまで資料化を進めていなかった石造物、棟札や絵馬、人々の信仰にまつわる行事や講、社会組織など、地域の歴史を伝える多くの文化財を確認することができた。

調査の進捗状況としては、令和2年度までにすべての村の調査を終え、6冊の報告書を刊行している。今後は、令和3年度に市川・浮島地域の調査報告書と、今までの調査成果をまとめた『補遺・総括編』を刊行予定である。



13か村位置図

#### 報告書一覧（平成25～令和2年度）

刊行年度	報告書名		
平成25年度	多賀城市文化財調査報告書第118集	多賀城市的歴史遺産	八幡村(一)
平成26年度	多賀城市文化財調査報告書第123集	多賀城市的歴史遺産	八幡村(二)
平成27年度	多賀城市文化財調査報告書第130集	多賀城市的歴史遺産	笠神村 下馬村
平成28年度	多賀城市文化財調査報告書第136集	多賀城市的歴史遺産	大代村 笠神村牛生 留ヶ谷村 高崎村 田中村
平成29年度	多賀城市文化財調査報告書第141集	多賀城市的歴史遺産	高橋村 新田村
令和2年度	多賀城市文化財調査報告書第147集	多賀城市的歴史遺産	南宮村 山王村

## ②令和2年度の調査成果

令和2年度は、南宮地域の調査で残していた建造物調査に加え、市川・浮島地域での石造物調査、仏像調査、民俗調査、神社の奉納物等の歴史資料の調査を実施した。

建造物調査については、東北工業大学ライフデザイン学部生活デザイン学科小山祐司教授に調査を依頼し、多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館に保管されている南宮神社の神輿を対象にした。詳細な図面の作成、小山教授による建築所見を得ることができたが、年代の特定には至らなかった。

石材調査は、東北大大学総合学術博物館協力研究員水広昌之氏に調査を依頼し、275基の石造物の肉眼鑑定を行った。その多くはアルコースやデイサイトといった近辺で採掘可能な石材であったが、中には縞状砂質泥岩（井内石）も数点あり、主要な採石地である石巻市から運ばれたものと考えられる。

仏像調査は、山形県東北芸術工科大学の長坂一郎教授と山形県白鷹町教育委員会の石井紀子氏に依頼し、玉川寺に安置されている1体の仏像を調査した。調査は、法量計測、写真撮影、長坂教授による観察が行われ、仏像の種類、制作年代や保存状態などが判明した。今回の調査対象は、明治26年の玉川寺の火災で焼損しつつも運び出され、本尊として祀られていたと伝わるものである。普段は厨子に入れられ、さらに宮殿に安置し、秘仏として公開はされていない。火災による炭化のため断定は困難であるが、薬師如来像として伝えられていた仏像は、地蔵菩薩坐像、もしくは僧形神像である可能性が指摘された。また、製作年代については、室町時代初期という結果であった。

石造物の拓本による記録作業は、市川・浮島地域で計135基の記録を完了し、拓本はとらずに釈文の記録に留めたものを合わせると、この地域では、304基の石造物を登録することができた。また、多賀城碑北側にある「つぼのいしぶみ道標」の関連で、奈良県奈良市の老舗製墨店である古梅園を訪れ、ほぼ同じ内容が刻まれたもう一つの「つぼのいしぶみ道標」も資料化した。

民俗調査は、市川地域で20人、浮島地域で3人への聞き書き調査を行い、昨年度と合わせると、市川で22人、浮島で18人から情報を得ることができた。

奉納物等の歴史資料の調査については、荒脛巾神社で絵馬31点、扁額2点、男根型木製品14点、足型木製品3点を記録した。また、養蚕神社の絵馬25点、多賀神社の棟札1点も記録し、採寸や記載内容の確認を行った。



南宮神社神輿



古梅園での調査風景



荒脛巾神社奉納物

## 2 展示

### (1) 展示概要

令和2年度は、多賀城市埋蔵文化財調査センター2階展示室及び多賀城史遊館で常設展を展示したほか、平成31年度の発掘調査成果を紹介した速報展、考古資料を中心とした企画展、文献史料や民俗資料を中心とした資料展を開催した。企画展は「多賀城碑が映す古代東北と北方世界」をテーマとして開催した。資料展は、多賀城旧13か村のうち、留ヶ谷・高崎・田中村の歴史遺産調査の成果をもとに「地域の文化財－留ヶ谷・高崎・田中村－」をテーマとして開催した。また、多賀城史遊館では、例年実施していた歴史体験事業「お正月の準備「親子でつくる鏡餅づくり」」の開催中止を受けた代替企画として、事務室前廊下のスペースを利用して、「臼伏せ」の展示を実施した。令和元年10月から開始した埋蔵文化財調査センターの改修に伴い、3階展示室は民俗資料の仮収蔵庫及び仮事務室として利用した。このため、例年は埋蔵文化財調査センター3階展示室で開催していた速報展は、多賀城史遊館2階展示室2で開催した。

令和2年度当初から新型コロナウィルス感染症対策として閉鎖していた埋蔵文化財調査センター展示室、多賀城史遊館展示室は、5月15日の緊急事態宣言の解除を受けて、ともに5月24日から展示を再開した。再開後は新型コロナウィルス感染症予防のため、アンケートや自由記述ノートの撤去、消毒液の設置、マスク着用・手指消毒の徹底、密集・密接回避のため床面積に応じた入場人数制限を行い、すべての展示で展示解説は基本的に行わないこととした。検温については、埋蔵文化財調査センター展示室では文化センター入口に設置してある検温器による測定とした。多賀城史遊館では、人的接触の可能性がある歴史体験の参加者に検温を実施した。展示見学のみの来館者には行っていない。

埋蔵文化財調査センター展示室内における主な変更点は、椅子に使用不可ゾーンを設ける、アンケートやノート記入用の机・椅子を撤去する、受付にビニール製の衝立を設ける、の3点である。接客や利用上の変更点は、リーフレット等の受け渡しはトレーを用いる、展示解説員等のマスク着用、团体予約の受付中止、収容人数上限（15名）に達した際に入場制限を実施する、定期的に換気・消毒を行うなどで、このほかに當時手指消毒の徹底、マスクの着用、密集・密接の回避を口頭で呼び掛けた。感染者数の減少を受け、11月1日からは収容人数の上限を解除し、团体予約の受付を再開している。再開後の团体見学利用は2件（合計13名）であった。なお、11月24日、文化センター職員の新型コロナウィルス感染により、11月25日の館内消毒に合わせて、埋蔵文化財調査センター展示室も臨時休館した。

多賀城史遊館展示室については、大きな変更は行わなかったが、展示室1の床面積が埋蔵文化財調査センター展示室の約1/3であることから、展示室1を基準とし、多賀城史遊館におけるすべての利用可能な部屋について最大収容人数を5名とした。また、換気のため廊下に面したすべての展示室の扉を開放し、それに伴い乾燥対策として加湿器を新たに設置した。接客や利用上の変更点は、团体予約の受付中止、収容人数上限（5名）に達した部屋に入場制限を実施する、定期的に換気・消毒を行うなどで、このほかに當時手指消毒の徹底、マスクの着用、密集・密接の回避を口頭で呼び掛けた。埋蔵文化財調査センター展示室でおこなった11月からの制限緩和については、多賀城史遊館ではおこなっていない。

令和2年度の埋蔵文化財調査センター展示室の来館者数は総数1,960名であり、1日あたりの平均来館者は約8.5名であった。学校での团体利用がすべてなくなったため、例年と比べて来館者数は大幅に減少している。個人の来館者は、特に企画展開催期間中の10～12月に多い傾向がみられる。

## 令和2年度展示年間スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
埋蔵文化財調査センター常設展示室	開館日「ヨーロッパのアーチティック」 「多賀城の歴史」とる展覧会	常設展「古代都市 多賀城」	企画展 16日 3日～12月20日	企画展 1月10日～3月1日	企画展							
埋蔵文化財調査センター常設展示室												
史跡解説室												
第1展示室	開館日「ヨーロッパのアーチティック」 「多賀城の歴史」とる展覧会	常設展「古代都市 多賀城」	各展示工事に伴う利用規制実施(2)→8月16日開館不可	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「埋蔵文化財調査センター常設展示室として利用」とる展覧会	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」	企画展「考古資料からみた多賀城の歴史」
史跡解説室	開館日「ヨーロッパのアーチティック」 「多賀城の歴史」とる展覧会	常設展「古代都市 多賀城」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」	常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」
その他の常設展示室							企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 6月16日～10月20日	企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 10月21日～12月20日	企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 1月10日～3月1日	企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 3月2日～5月3日	企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 5月14日～7月13日	企画展「人やもの伝を重ねた多賀城」 7月26日～9月25日

## 埋蔵文化財調査センター展示室入館者数

	開館日数	一般	高校	小中	月計
4月	0	0	0	0	0
5月	7	13	0	3	16
6月	25	104	0	8	112
7月	27	159	1	21	181
8月	20	129	1	31	161
9月	20	105	0	13	118
10月	25	294	0	7	301
11月	24	279	3	8	290
12月	18	194	0	4	198
1月	19	179	0	18	197
2月	22	198	1	5	204
3月	22	170	0	12	182
合計	229	1,824	6	130	1,960

## (2) 常設展

### ① 埋蔵文化財調査センター常設展示室「古代都市 多賀城」

多賀城跡の南面で実施した発掘調査により、古代の道路網による方格地割とまち並みが発見され、そこに居住した人々の生活が餘々に明らかになっている。漆紙文書や人面墨書き器、題簽軸木簡など発掘された遺物を通して、平安時代に多賀城の城下に建設された「古代都市 多賀城」の様相を紹介している。



埋蔵文化財調査センター展示室



多賀城史遊館常設展示室 1



多賀城史遊館常設展示室 2

### ② 埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）展示室

#### ・常設展示室1 「考古資料からみた多賀城の歴史」

多賀城市内の発掘調査で出土した考古資料を中心に、縄文時代から江戸時代まで、年代を追った通史展示を行っている。市内の歴史概要を理解しやすいように紹介している。

#### ・常設展示室2 「民俗資料からみた多賀城のくらし」

「農家の一年～昭和四十年代までの多賀城のくらし～」と題し、民俗資料展示を行っている。多賀城市内で使用されていた農具と、農家の生活に関連する資料を展示し、昭和40年代頃まで実際に多賀城市内で営まれていた農家のくらしを、一年の流れに沿って紹介している。

### (3) 速報展

名称：速報展「発掘された遺跡—平成 31 年度の調査成果—」

期間：令和 2 年 6 月 16 日（土）～同年 7 月 31 日（日）

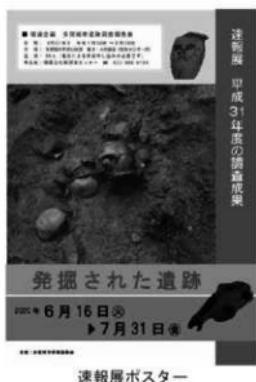
会場：埋蔵文化財調査センター体験館展示室 2 入館者数：186 人

#### ①展示の趣旨

本展示は、平成 31 年度に本市教育委員会が実施した発掘調査の成果をいち早く紹介することで、市民をはじめ多くの方々に、埋蔵文化財に対する理解を深めてもらうことを目的として開催した。

平成 31 年度に実施した発掘調査は、37 件である。その内訳は、住宅建築 21 件、宅地造成 10 件、店舗・事業所等建設 5 件のほか、平成 27 年度からの継続事業である大区画ほ場整備事業に関わる調査を実施した。

これらの調査成果は、今から約 1700 年前の古墳時代前期から近代に及び、いずれも本市の歴史を解明する貴重なものである。今回はそのうち 7 件の調査について、写真パネルや出土資料により紹介した。



速報展ポスター

#### ②展示の構成

##### ・導入 多賀城の変遷

多賀城は、神亀元年（724）、律令政府による東北地方支配の拠点として建設された。約 900 m 四方の範囲を築地塀等で囲み、中央には重要な政務や儀礼を行う政庁があった。天平宝字 6 年（762）、藤原朝鶴によって大規模に改修された後、宝亀 11 年（780）に伊治公告麻呂事件、貞観 11 年（869）には大地震で被災するがそのたびに復興され、11 世紀中頃までその役割を担った。

##### ・導入 まち並みの形成

8 世紀末頃になると城内では役所の施設が急増し、城外では主要道路である東西・南北の大路や河川の整備が行われた。9 世紀になると多賀城南面から南西部にかけて方格地割が施行され、東西・南北の小路で区画されたまち並みが形成された。まち並みの中には、都から赴任した上級役人をはじめ、中・下級の役人、兵士、庶民など様々な階層の人々が暮らし、その周辺には水田や畑などの耕地が広がっていた。

##### ・ほ場整備事業に伴う発掘調査（古墳時代）

西暦 300 年頃の古墳時代前期には水田が広がり、大規模な護岸施設を設けた水路が存在していたことなどが明らかになっている。今回の調査では、山王遺跡の中央やや東寄りの調査地点で発見した古墳時代前期の幅約 2 m の溝跡から、赤い塗料を塗った器台や壺など多量の土器を発見した。西暦 600 年頃（古墳時代後期）の堅穴建物跡も 1 棟発見し、周辺に集落の存在が想定される。

##### ・西沢遺跡第 37 次調査

多賀城東門の東側約 300 m の丘陵部を調査し、掘立柱建物跡、堅穴建物跡、道路状遺構など多数の遺構を発見した。掘立柱建物跡や堅穴建物跡は多賀城と同時代のもので、堅穴建物跡の中には土器や瓦のほかに鉄製の鎌や紡錘車などが出土したものや、床に焼面があり鍛冶を行っていたと推定できるものも存在した。道路状遺構は、古代以降のものと考えられる。

#### ・市川橋遺跡第 98 次調査

南北大路と東西大路の交差点から南東約 80 m の地点を調査し、南北方向に延びる 10 世紀後半から 11 世紀前半にかけての河川跡を確認した。河底からは、古代の土器とともにウマ・イノシシ・シカなどの骨が出土し、ウマは頭頂部が割られ、穴が開けられていた。これは、皮鞣しに使用するため、脳髄を摘出した痕跡と考えられる。

#### ・ほ場整備整備事業に伴う発掘調査（古代）

山王遺跡北半の施工箇所に調査区を設定し、多賀城南面に建設された主要道路の東西大路をはじめ、東西・南北の区画道路（小路）を 9 条発見した。区画の中からは、掘立柱建物跡や井戸跡などが多く見つかり、特に東西大路沿いの区画には、大規模な柱穴を持つ建物が建ち並んでいた様子が明らかになった。東西大路の側溝からは、祓いに使用した人面墨書き土器を発見した。

**まじないの道具**：東西大路の側溝からは、9 世紀前半頃の完形の土器がまとまって出土した。出土遺物の中には、格子状の「九字」という魔除けと考えられる記号を墨書きした土器が含まれている。縦横の線は、迷い込んだ魔物を抜け出せないようにする結界と考えられている。また、人面墨書き土器や男性器を模した石製陽物も出土している。人面墨書き土器は、自身の罪や穢れを封じ込めて水に流して祓い清めるのに用いられたと考えられる。石製陽物は、病や疫神の侵入を防ぐための道具と考えられる。

**古代の暦**：東西大路の道路側溝からは、古代の具注暦に関わる木簡が出土した。具注暦とは、暦日の下にその日の吉兆・禁忌などを注記した暦である。毎年都の陰陽寮で作成され、諸国から都に上った役人が書写して、国に持ち帰っていた。

**贅沢な食器**：多賀城や城下のまち並みからは、尾張国や美濃国、京やその周辺の窯で焼かれた施釉陶器が多数出土している。特に東西大路に面した区画からの出土量が多く、この場所がまち並みの中の一等地であったことがうかがえる。

#### ・山王遺跡第 211 次調査

西 7 道路と東西大路南 1 間道路を発見し、西 7 道路の西側で丁字路に合流している状況を確認した。これらの道路跡は、一度路面、側溝ともに完全に土砂で覆われた後、ほぼ同位置で復旧されたことが明らかになった。一方、西 7 道路の東側では、畑に関連する小溝群を発見した。道路側溝の埋土から、灰釉・緑釉陶器、会津郡大戸窯産の須恵器瓶などが出土している。

#### ・山王遺跡第 209 次調査

多賀城南面に広がる道路網のうち、南 1 道路の状況を確認するための調査を行った。この道路跡は、一度路面、側溝ともに完全に土砂で覆われた後、ほぼ同位置で復旧されたことが明らかになった。道路幅は、最も新しい段階で約 5.7 m、次の段階では約 6.7 m である。最も新しい段階の側溝が埋没した後は、道路として復旧されることはない。

#### ・山王遺跡第 214 次調査

山王遺跡の南端部付近で、古代の掘立柱建物跡 5 棟、区画溝 1 条、小溝群などを発見した。掘立柱建物跡は小規模であり、小溝群は畑に関連する遺構と想定される。年代は、小溝群が 8 世紀末から 9 世紀前半頃、掘立柱建物跡が 10 世紀前半頃で、耕作地から建物分布域へと変化したことが判明した。

#### ・山王遺跡第 207 次調査

墓石などを伴わない古い墓を発見し、30 基以上の墓の存在が明らかになった。このうち 3 基を調査し

たところ、改葬されていないことが明らかになった。棺はいずれも座棺で、死者に持たせた古錢や漆器、数珠、杖などが納められていた。これらの墓がある場所は、昭和36年の航空写真では水田となっており、それ以前に集落の墓域としての役割を終えたと考えられる。



速報展入口



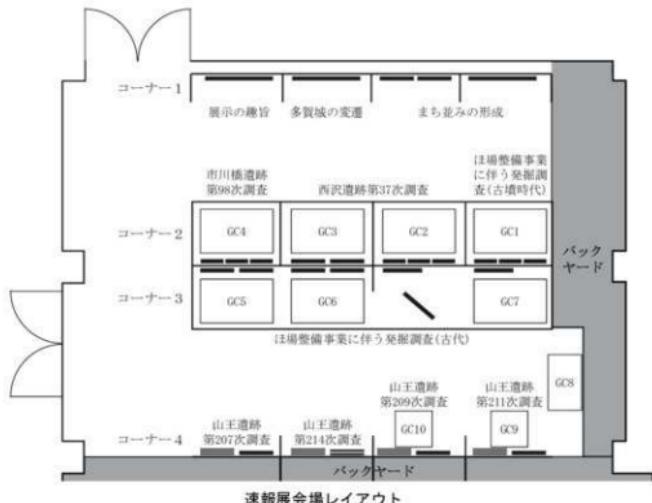
導入部パネル



展示状況



ほ場整備事業に伴う発掘調査出土遺物



速報展会場レイアウト

## 速報展展示資料一覧

テーマ	種別	内 容	テーマ	種別	内 容
1 導入	文字P	展示の趣旨	3 ほ場整備事業に伴う発掘調査(古代)	文字P	ほ場整備事業に伴う発掘調査(古代)
	文字P	多賀城の変遷		文字P	まじないの道具①
	文字P	まち並みの形成		土師器壺、須恵器壺	
	図P	多賀城と城下の方格地割		GC5	墨書き器(大・阿・吉・十・池・九)
	図P	方格地割と調査区の位置		図P	九字概念図
	文字P	ほ場整備事業に伴う発掘調査(古墳時代)		文字P	まじないの道具②
	図P	溝状遺構土器出土状況		図P	東西大路 北側溝 土器出土状況
	図P	土器を取り上げる発掘作業員		GC6	石製陽物、人面墨書き器
	GC1	土師器壺・甕・壺・器台 ミニチュア土器、土製支脚 石製品		図P	図P 出土位置(空撮)
	文字P	西沢遺跡第37次調査		文字P	古代の層
2 西沢遺跡 第37次調査	図P	掘立柱建物検出状況		図P	東西大路出土木簡
	図P	調査区空撮写真		文字P	釐沢な食器
	GC2	須恵器横瓶・円面鏡 丸瓦、石製紡錘車		GC7	灰釉陶器壺、緑釉陶器壺・皿 (参考資料)東西大路に面した区画から
	図P	堅穴住居		GC8	須恵器小瓶、会津郡産の須恵器瓶 底部にムシロ痕のある土器
	図P	堅穴住居		文字P	山王遺跡第211次調査
市川橋遺跡 第98次調査	GC3	土師器壺・蓋 須恵器壺・瓶・蓋		図P	古代の烟跡
	文字P	市川橋遺跡第98次調査		図P	西7道路と東西道路のT字路完掘状況
	図P	ウマ頭骨出土状況		図P	西7道路と東西道路のT字路検出状況
	図P	河川跡調査状況		GC9	緑釉陶器合子、灰釉陶器、灰釉陶器壺
	GC4	動物遺存体ウマ・シカ・ウシ		文字P	山王遺跡第209次調査
4 山王遺跡 第209次調査	図P	南1道路検出状況		図P	南1道路断面
	図P	山王遺跡第209・211次調査と 周辺の調査成果		図P	山王遺跡第209・211次調査と 周辺の調査成果
	GC10	土師器小型壺 灰釉陶器壺、緑釉陶器三足盤		GC10	土師器小型壺 灰釉陶器壺、緑釉陶器三足盤
	文字P	山王遺跡第214次調査		文字P	山王遺跡第214次調査
	図P	掘立柱建物模式図		図P	掘立柱建物模式図
	図P	調査区全貌		図P	調査区全貌
	図P	掘立柱建物柱穴断面		図P	掘立柱建物柱穴断面
	文字P	山王遺跡第207次調査		文字P	山王遺跡第207次調査
	図P	墓検出状況		図P	墓検出状況
	図P	近世～近代の棺箱		図P	棺の深さを測る調査員

### (4) 企画展と関連イベント

名 称：第30回企画展「多賀城碑が映す古代東北と北方世界」

期 間：令和2年10月3日（土）～同年12月20日（日）

会 場：埋蔵文化財調査センター2階展示室

入館者数：789人

#### ①展示の趣旨

令和6年（2024）は、多賀城碑に記された神龜元年（724）の多賀城創建から1300年という節目の年にあたる。その年代的根拠となる資料は、多賀城碑が唯一のものであることから、その重要性を機会あるごとに普及啓発していくこと、そして多賀城創建1300年という記念すべき年に向かって計画的な普及啓発活動を続けていくことが必要と考える。

本展示は、多賀城碑の形と文字、銘文の中の多賀城創建、そして蝦夷国、靺鞨國という二つのクニの名称から、多賀城碑が製作され



企画展ポスター

た時代背景を探ろうとした一つの試みであり、多賀城碑が東北地方にとどまらず、我が国の古代史上きわめて重要な歴史資料であることを改めて考える機会とするため企画したものである。

## ②展示の構成

### コーナー1. 多賀城碑と古代日本の碑

中国の影響により、日本列島内に碑が建てられるようになるのは、7世紀後半頃と考えられているが、現存する古代の碑はわずか19基で、かつてあったものを含めても26基にすぎず、同時代の中国・朝鮮半島と比べ、きわめて少ない。また、建郡記念碑である多胡碑を除くと、他は墓碑や仏教色の強い、私的に建立されたものが多いなか、政治色を帯び、ひと際異彩を放っているのが多賀城碑である。

#### ・多賀城碑とは

大野朝臣東人による神亀元年の多賀城創建と、藤原朝鶴による天平宝字6年(762)の多賀城修造という、正史には見えない二つの事実と年代を刻む。さらに建立年月日は朝鶴が参議に就任した日であることから、この碑は多賀城修造を記念し、ひいては朝鶴自身を顕彰した碑といえよう。

#### ・古代日本の碑の系譜

古代日本の碑の形状のうち、多賀城碑は唯一円首という形で、この系譜は直接中国からもたらされた。一方、頭部に笠石を乗せた蓋首は、中国から朝鮮半島を経由し、かなり簡略化した形で日本に伝わった。また自然石の碑は中国に例がなく、朝鮮半島に源流が見いだされる。

#### ・多賀城碑の文字の「モデル」

かつて多賀城碑の文字は、中国や日本の先行する多くの石碑などからの集字であるとされていたが、黒田正典氏の研究により、さまざまな種類の文字を参考にしながら、一人の人物によって書かれたものと考えられている。

### コーナー2. 神亀元年の多賀城

律令政府による東北政策の拠点となった多賀城ではあるが、その設置に至る経緯は正史になく、唯一、神亀元年(724)に大野東人が置いたと多賀城碑に記されるのみである。発掘調査によって得られる遺構や遺物は、軍事的なものは少なく、多くは行政的な官衙に関わるものが多い。そのため陸奥国府という側面が強調され、郡山遺跡にあった国府を北に進めたものと考えられているが、多賀城は神亀元年当初から国府だったのだろうか。



企画展展示風景

#### ・飛鳥時代の陸奥国府

大宝律令が制定されて地方行政制度が整備されると陸奥国にも国府が置かれた。その時期の陸奥国府と考えられているのが仙台市長町にある郡山遺跡である。東西約670m、南北約800mの範囲から新旧二時期(I期・II期)の遺構が重複して発見されている。

#### ・地元住民の抵抗

郡山遺跡に国府があった頃、律令国家の広がりは大崎平野に達した。その北には蝦夷のクニが広がり、

それを取り込んで国土拡大を目指す政府に対し、地元住民は抵抗した。「続日本紀」養老4年（720）9月28日条に記される「蝦夷反乱」はその一つで、按察使の殺害という事態にまで及んだ。

#### ・郡山官衛と多賀城

多賀城は神亀元年（724）の創建とされているが、政府と南門を結ぶ大路など主要施設の造営はそれ以前に着手されていたと考えられている。政府でも第Ⅰ期に先行する区画施設が存在するなど、蝦夷政策の拠点が郡山Ⅱ期から多賀城へ移行する過程については、今後究明すべき課題が多い。

#### ・多賀城が創建された時代

和銅から養老年間（708～724）は、全国的に地方行政制度の整備が行われたと考えられている。その中心となる国府の整備も進められた時期に多賀城は建設された。創建期の多賀城は、多賀城碑に「城」と記しているが、具体的にどのような使命を帯びて建設されたのだろうか。

#### コーナー3. 渤海と靺鞨

渤海は、唐・新羅に滅ぼされた高句麗の遺民によって、698年、唐の北東部に建国された。靺鞨はその北部から日本海にかけて点在したツングース系民族で、黒水靺鞨など有力な部族もあったが、国家を形成するには至らなかった。藤原朝鷹が多賀城碑に刻んだ「靺鞨国」には762年当時の東アジア情勢を読み解く手がかりが込められており、当時国内で権力を掌握していた父仲麻呂の外交政策の意図に迫ることも可能である。

#### ・日本における「中華思想」

多賀城碑にみえる「蝦夷国」は、異民族と見做されていた蝦夷の地で、日本の東に設定されていた。これと呼応するのが「靺鞨国」で、当時日本と友好関係にあった渤海の北に居住する靺鞨民族を指す。東の蝦夷、北の靺鞨、こうした記載は、朝鷹の父仲麻呂が思い描く、日本における「中華思想」を具体的に示したものではないだろうか。

#### コーナー4. 蝦夷のクニ

多賀城碑にある「蝦夷国」は陸奥国の北側に広がるいまだ政府の支配下に入らない広大な土地であり、蝦夷とは政府側がその地の住民をさした蔑称である。蝦夷のクニには各地に豪族が存在して地城を統括し、その中には政府と関わりを持ちながら「公」姓を与えられる者もあった。人々の生活基盤は基本的に国内と同様であり、海や山にも積極的に働きかけていた。蝦夷のクニやさらにその北方世界との交易は陸奥国の重要な任務であった。

#### ・中央政府による蝦夷政策

藤原朝鷹は蝦夷政策の拠点として、天平宝字4年（760）に桃生城と雄勝城を築き、その後も政府は神護景雲元年（767）に伊治城を築くなど、強硬な蝦夷政策を推し進めた。抵抗する現地住民「蝦夷」との争いは長期化し、政府の支配が北上盆地北部（盛岡市付近）に及ぶまで約40年を要した。

#### ・蝦夷の土器

東北地方北部の奈良時代以前の遺跡からは、口縁部に数条の沈線や複数の段、鋸歯状の沈線など、單



コーナー4 蝦夷のクニ

純な装飾を施した特徴的な土師器甕が出土する。このような土器は、北海道など北方の影響を受けた土器と考えられ、これらを使用した人々の北方世界との交流を示している。

・海の螺壳

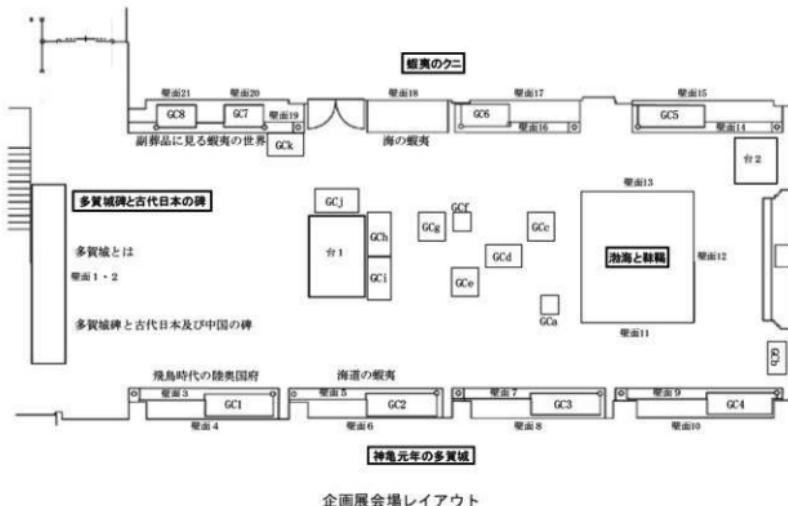
「続日本紀」巻亀元年（715）10月29日条に、蝦夷須賀君古麻比留は閏村への郡家設置を請願したことと記されている。その中で、先祖以来この地で採れる昆布を欠かさず貢献しているとも述べており、薩摩国の交易雑物である昆布を貢納する蝦夷の空を伝えている。

#### ・副葬品に見る蝦夷の世界

多賀城碑が建立された頃、蝦夷国との境界は、現在の栗原市や登米市など宮城県北部にあった。その地に残された古墳や横穴墓からの出土品には、武器や装身具のほか官人としての身分を表す腰帯の金具もあり、政府との関わりを窺にするさまざまな蝦夷の姿を伝えている。

### ③ 声上的

令和6年に迎える多賀城創建1300年の唯一年代の根拠となるのが多賀城碑である。そこに刻まれた内容は、古代東北の歴史にとどまらず、古代日本ひいては古代の東アジア情勢を映しており、他に類を見ない石碑である。現在建設中の多賀城南門は、碑の建立者である藤原朝獨によって建てられたもので、この両者が並び立っていた古代の景観が3年後に再現されることになる。そうした中、多賀城碑のもつ比類なき価値を伝え続けることが何より重要なことで、そのためにも、さまざまな視点からの普及啓発活動を今後も継続する必要がある。さらにこうした活動によって、碑の価値づけがさらに高まることに繋がっていくものと考える。



企画展展示資料一覧

展示 場所	種別	資料名	展示 場所	種別	資料名
コート一 多賀城跡と古代日本の神	国宝P	多賀城跡と古代日本の神	GCh	文字P	電車道跡の真 瓦瓦。平瓦、軒丸瓦
埋面1 織部P	展示の構成	展示の構成	コート一 3 駿馬上駕籠	国宝P	駿馬上駕籠
埋面2 写真P	写真P	多賀城跡とは	壁面11 コート一 P	日本における中華思想 和洋使關係年表、秋田城	日本における中華思想 和洋使關係年表、秋田城
埋面2 国・写真P	国・写真P	古代日本の古跡	壁面12 壁・写真P	南越と日本、クラスキノ城遠景	南越と日本、クラスキノ城遠景
埋面2 国・写真P	国・写真P	多賀城跡の文字の「モデル」	壁面13 国・写真P	クラスキノ城平面図、調査区位置図	クラスキノ城平面図、調査区位置図
古1 多賀城跡（複製）	国・写真P	「モデル」となった文字と出典	コート一 4 故郷のクニ	故郷のクニ	故郷のクニ
魅面1 舞衣(左) 舞衣(右)	国・写真P	多賀城跡と舞衣	台2 写真P	墓地地図 伊治城跡地盤断面剥ぎ取り	墓地地図 伊治城跡地盤断面剥ぎ取り
埋面3 コート一 P	神龜元年の多賀城	北に延びる山道	埋面14 コート一 P	姫夷のクニ 中國政府による姫夷政策	姫夷のクニ 中國政府による姫夷政策
埋面4 国・写真P	国・写真P	飛鳥時代の多賀城	壁面15 国・写真P	姫夷分布図 伊治城跡地盤断面剥ぎ取り	姫夷分布図 伊治城跡地盤断面剥ぎ取り
GCT	国P	山王御跡、土師器樂、須恵器窯、須恵器高坪、須 恵器脚付杯、須恵器高坪、須恵器平底、須 恵器脚付盤、須恵器頸頭 地元住民の説話	壁面16 文字P	新田井更造跡の土器 土師器杯、土師器樂、土師器高坪、財(複数)	新田井更造跡の土器 土師器杯、土師器樂、土師器高坪、財(複数)
壁面5 国P 写真P	国P 写真P	井手遺跡出土「南道」銀木簡	壁面17 写真P	房の泥瓦道 土師器杯、土師器樂、土師器高坪	房の泥瓦道 土師器杯、土師器樂、土師器高坪
壁面6 国P 写真P 文字P	国P 写真P 文字P	「山道」銀木簡文書(市川橋遺跡) 古代に海道?呼ばれた地域	GCh	鐵刀、鋸手刀(複数)	鐵刀、鋸手刀(複数)
GCT	国P	井手遺跡土器 土師器杯、土師器樂、土師器蓋。 土師器玉、市川橋遺跡出土漆器文書	GCh	口刀、土製筋轆輪	口刀、土製筋轆輪
壁面7 国・写真P	国・写真P	郡山官衙と多賀城	GCh	土師器杯、土師器樂、土師器高坪、 土師器ミニチュア	土師器杯、土師器樂、土師器高坪、 土師器ミニチュア
埋面8 国P 文字P	国P 文字P	郡山官衙と多賀城の比較:配置と形 郡山遺跡・山王遺跡の土器	GCh	五条丸古墳出土玉 鏡手刀、赤彩球形劍劍	五条丸古墳出土玉 鏡手刀、赤彩球形劍劍
GCT	国P	土師器杯、土師器樂、土師器蓋。 土師器高坪台付、須恵器窯、須恵器高台付杯、 須恵器蓋、須恵器ハサワ	GCh	土師器杯、土師器樂、土師器高坪、 土師器蓋	土師器杯、土師器樂、土師器高坪、 土師器蓋
GCT	国P	圓面皿	GCh	勾玉 切子玉、小玉、丸玉	勾玉 切子玉、小玉、丸玉
壁面9 写真P	写真P	多賀城が創建された時代	GCh	切子玉、小玉、玉、丸玉 切子玉、小玉、玉、丸玉、鉢具	切子玉、小玉、玉、丸玉 切子玉、小玉、玉、丸玉、鉢具
GCT	国P	瓦窯と供給先。多賀城の行政、多賀城創建期の遺構	GCh	勾玉 小玉、丸玉、管玉、切子玉、トント玉、鉢具	勾玉 小玉、丸玉、管玉、切子玉、トント玉、鉢具
埋面10 国・写真P	国・写真P	山王遺跡出土漆器文書、政庁南大路から出土した木 舟	GCh	屏風用に見る姫夷の世界 横木扇の分布	屏風用に見る姫夷の世界 横木扇の分布
埋面10 国・写真P	国・写真P	多賀城創建時の瓦	壁面20 国・写真P	小玉、丸玉、管玉、切子玉、トント玉、鉢具	小玉、丸玉、管玉、切子玉、トント玉、鉢具
GCT	国P	木舟戸附出土漆器文書 瓦窯と供給先。瓦窯文書、瓦窯文書	GCh	鳥矢ヶ崎第1号墳 鈴具	鳥矢ヶ崎第1号墳 鈴具

#### ④ 関連企画 1 記念講演会

名 称：「多賀城碑とその時代」 開催日：令和2年10月24日（土） 午後1時20分～4時30分  
会 場：多賀城市文化センター小ホール 参加人数：203人  
内 容：講演「多賀城碑が刻む『激動の古代東北』」

講師：平川 南氏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構機構長）

## 講演「藤原伸麻呂政権下における律令国家の東北政策」

講師：佐藤 信氏（東京大学名誉教授）

2024年は多賀城創建1300年という記念年の年にあたり、創建の実年代の根拠となる唯一の資料が多賀城碑である。企画展では他に類を見ない碑の形、刻まれた文字の多様性をはじめ、創建年代、蝦夷国・靺鞨国といった表現などから、多賀城碑とその製作された時代背景をさぐろうと試みた。このような展示内容を踏まえ、より深く多賀城碑の価値や建立された時代背景を語っていただこうと、企画展開催前に、多賀城碑並びに古代史研究における第一人者である両氏に講演を依頼したものである。



## 対談の様子

#### ・平川南氏講演要旨

日本列島に現存する古代の石碑は、わずか18碑であり、碑文の大半は、仏教関係（墓碑・供養碑など）である。日本三古碑とされる「那須国造碑」（国宝）も個人の供養碑、「上野三碑」山ノ上碑・金井沢碑は供養碑、多胡碑は建郡碑（ユネスコ「世界の記憶」2017年登録）である。

古代日本における石碑の中で異彩を放つのは多賀城碑である。奈良時代中頃、時の最高権力者・藤原仲麻呂の四男として、東北地方支配の全権を託された藤原朝鶴は着任と同時に陸奥国桃生城と出羽国雄勝城を新たに造営、あわせて多賀城と秋田城の修造事業を実施した。

国史『続日本紀』に全く記載のない多賀城創建年代「神龜元年」（724）、修造年代「天平宝字6年」（762）を明記している。多賀城跡の発掘調査で、両年代の妥当性が実証された。

さらに、仲麻呂の中国・唐風好みはよく知られているが、朝鶴は東アジア情勢に精通し、天平宝字4年（760）、新羅使来朝の折、自ら大宰府に赴き、欠礼を責め、本国に返す。

多賀城碑文に「蝦夷国界一百廿里」と記し、朝鶴の強硬な東北経営の成果を主張した。さらに陸奥出羽接察使の朝鶴は、北を、大海を越え大帝国唐および友好国・渤海の東北地方に居す“北狄”とされた靺鞨部族を「靺鞨國三千里」と表記した。日本列島における異民族とした「蝦夷」と、唐・渤海（前身の高句麗）が北狄とした「靺鞨」部族を併記した仲麻呂政権下の軍事・外交の牽引者・藤原朝鶴ならではの碑文といえよう。その石碑は1300年間、数多くの為政者・文人墨客そして地元の人々によって最良の状態で守り続けられてきた。多賀城碑は「激動の古代東北」さらに8世紀の“激動の東アジア世界”を見事に刻んでおり、日本列島に遺る古代の石碑のなかでも、古代国家に関わる比類なき価値を有する歴史資料である。



平川南氏 講演風景

#### ・佐藤信氏講演要旨

藤原仲麻呂（706～764）は南家藤原武智麻呂の第二子に生まれ、叔母にあたる光明皇后の権威と結びについて、奈良時代後期に大きな権勢を誇った。とくに聖武天皇の娘の孝謙天皇につづく淳仁天皇（廢帝）は、仲麻呂の擁立によって即位した経緯から、義父にあたる仲麻呂を破格に高く処遇する。仲麻呂は、恵美押勝の名や鑄銭・出舉などの経済特權を得たほか、太保（右大臣）さらに太師（太政大臣）となって権力を集中する。息子たちや腹心を參議にして一強体制を築くが、一方で他氏族や藤原他家の反感も高まった。

光明皇太后が亡くなり、孝謙太上天皇が道鏡を寵愛して淳仁天皇と仲違いすると、仲麻呂の立場は揺らぎ始める。天平宝字8年（764）、ついに反乱を起こすが、平城京での緒戦に敗れ、地盤の近江や息子が国司である越前をめざすものの、孝謙太上天皇側の軍勢に敗れて、琵琶湖西岸で斬られた。



佐藤信氏 講演風景

仲麻呂の息子である藤原恵美朝鶴は、天平宝字元

年（757）に藤原守となり翌々年には鎮守將軍も兼ねる。雄勝城や桃生城を築いた功績で位階を上げ、天平宝字6年（762）には兄の真先・訓備麻呂とともに參議にも任じられた。この年多賀城の大改修を行い、政庁の改修とともに、外郭南辺を拡張して壯麗な南門を築き、記念の多賀城碑を建てた。天平宝字8年（764）の仲麻呂の乱では、父・一家と同行して討ち死にした。朝薦は、多賀城に大きな足跡を残したといえよう。

#### ⑤関連企画2 拓本展示

名 称：人々の関心を集めた多賀城碑

期 間：令和2年10月6日（火）～10月20日（火）

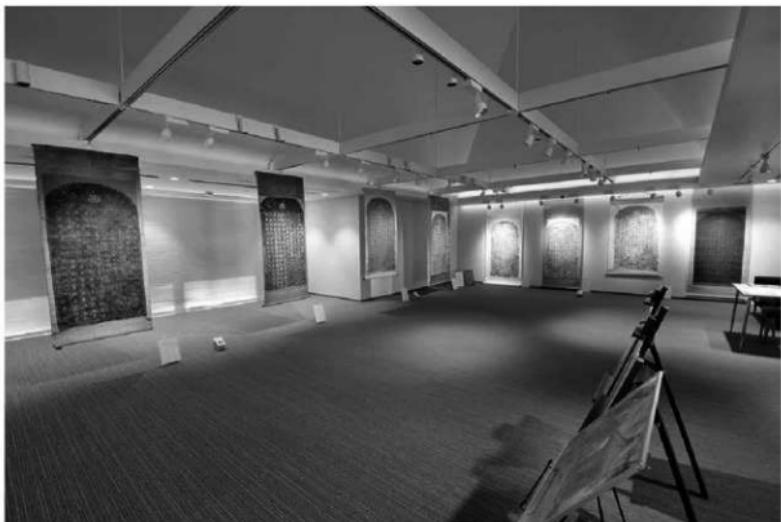
会 場：多賀城市立図書館3階ギャラリー

入館者数：127名（図書館103名、ホワイエ24名）

内 容：江戸時代以来、多くの人々が多賀城碑に関心を寄せ、その結果拓本も多数作成された。多賀城市教育委員会が所蔵する拓本は、採られた時期が明確ではないものもあり、また、原碑から採られたもの、拓本用の版木から採られたものなど、その種類も一様ではない。これらの拓本を一堂に会して展示することで相互の比較検討が可能となり、それぞれの拓本の特徴を把握することができる。

展示では市所蔵の拓本を含む9幅と碑周辺の古写真を紹介し、上記目的を達成する内容とした。従来、個々の拓本の観察のみではわからなかった相違点、例えば文字の違いや太さ、あるいは質感など、並べてみることで初めて確認できたことがあった。今後さらに比較検討対象の拓本数が増えることによって、相対的な年代が明らかになるものも出現し、多賀城碑研究の一助になるものと思われる。

なお、記念講演会当日の令和2年10月24日（土）、多賀城市文化センター小ホールホワイエを会場として、同内容により展示を行った。



拓本展風景

## (5) 資料展

名 称：令和2年度資料展「地域の文化財 一留ヶ谷・高崎・田中村一」

期 間：令和3年1月10日(日)～同年3月14日(日)

会 場：埋蔵文化財調査センター2階展示室

入館者数：535人

### ①展示の趣旨

本市では平成25年度から令和2年度まで、市内全域を対象とした文化財調査を行った。この調査は、江戸時代多賀城市域にあった13の村ごとに実施しており、これまで資料化していなかった地域の歴史を伝える多くの文化財を確認できた。そこで平成30年度から、地域の特色ある歴史を文化財調査の成果をもとに旧村単位で紹介することとし、第3回にあたる本展示では、平成28年度に調査を行った旧留ヶ谷・高崎・田中村を取り上げ、地域に残る多くの資料から3つの地域とそこに暮らす人々の歴史を紹介した。



資料展ポスター

### ②展示の構成

#### コーナー1. 地図と写真にみる地域の変化

本展示で対象とした3つの地域は本市中央部に位置し、北から延びる丘陵部に古くから集落が形成されてきた。留ヶ谷地域は、アジア・太平洋戦争時の海軍工廠男子工員寄宿舎の建設や、終戦後の占領米軍の管理などによって地形・景観とも大きく変化した。また、高崎・東田中・志引地域は、仙石線の多賀城駅、東北本線の国府多賀城駅が近いことから、平成以降水田地帯にも商業施設や住宅が立ち並び、開発が進んだ地域である。コーナー1では、絵図や古地図、航空写真からこれらの地域の移り変わりを紹介した。

#### コーナー2. 留ヶ谷村

コーナー2では、留ヶ谷地域にある寺社仏閣を軸とし、「天満宮と神明社」「向泉院」「糸掛観音」「藤樹地蔵」の4つのテーマを取り上げた。これらの歴史や地域の社会組織との関わり、現在の祭祀と信仰の様子について、祭祀の道具や仏像、奉納物などの資料を展示して紹介した。

#### コーナー3. 高崎村

コーナー3では、高崎地域の寺社仏閣、それらを信仰する講やこの地域で盛んであった日蓮宗信仰などについて、「鬼子母神堂と高崎の日蓮宗信仰」「化度寺」「日光院」「多賀神社」「馬頭講」「太子堂と太子講」の6つのテーマを設定して紹介した。

#### コーナー4. 田中村

コーナー4では、かつて田中村と呼ばれた東田中・志引地域を取り上げ、地域の信仰の中心になっている志引觀音堂や、三所宮に関連する文化財や講の活動を紹介した。また、デンジョウヤマと呼ばれる丘陵に存在する多くの供養塔や墓標から、一帯が古くから信仰の場であったことを示し、関連する絵図や拓本の展示を行った。

### ③まとめ

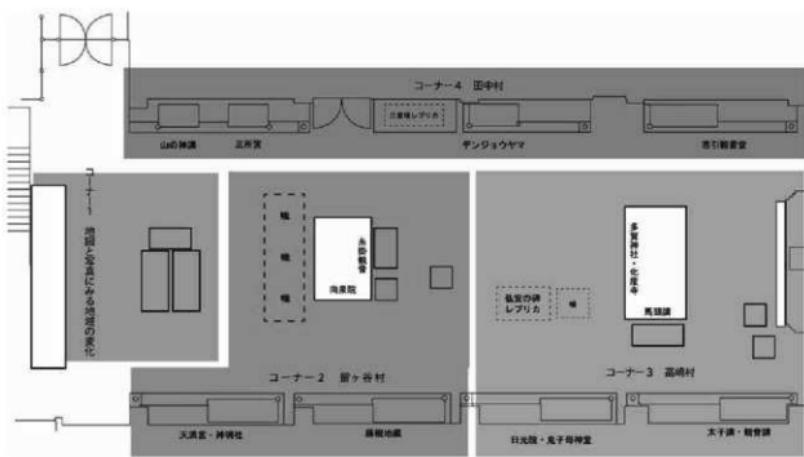
本展示では、身近であるために見過ごしてしまいがちな地域の歴史、現在の暮らしに焦点を当て、地域で守り伝えられてきた資料を多く展示した。展示資料64点の内56点は地域住民が所蔵するもので、普段は目にできない貴重な資料をもとに展示を構成し、その存在を広く紹介することができた。



展示状況



藤樹地蔵展示コーナー



資料展会場レイアウト

## 資料展展示資料一覧

コーナー		番号	資料名	年代	点数
コーナー1 地図と写真にみる地域の変化	天満宮と神明社	1	地籍図		3
		2	棟札	大正2	1
		3	棟札	昭和14	1
		4	棟札	昭和33	1
		5	棟札	昭和58	1
		6	紙札		1
		7	天満宮幟	享和2	1
		8	天満宮幟	明治28	1
		9	神明社幟	文久元	1
		10	提灯	昭和39	2
コーナー2 留ヶ谷村	藤樹地蔵	11	幟	大正10	1
		12	絵馬（亀）	明治14	1
		13	絵馬（相撲）	明治23	1
		14	絵馬（江口氏奉納）	明治24	1
		15	絵馬（武士）	明治35	1
		16	絵馬（餅）	明治44	1
		17	絵馬（男拝み）	明治44	1
		18	絵馬（馬）	大正4	1
		19	絵馬（蛇）	大正8	1
		20	絵馬（男拝み）	昭和3	1
コーナー3 高崎村	系向掛泉観音と	21	絵馬（猫）		1
		22	オマクラ		6
		23	天部形立像	鎌倉時代	1
		24	金銅型觀音菩薩立像	江戸時代初期	1
		25	厨子入木造十一面觀音菩薩立像	江戸時代後期	1
		26	寄進札	大正13	1
		27	棟札	昭和13	1
		28	祈拂札	明治21	1
		29	祈拂札	明治25	1
		30	祈拂札		1
コーナー4 田中村	鬼子母神堂	31	祈拂札		1
		32	祈拂札		1
		33	幟	明治19	1
		34	弘安の碑レプリカ		1
		35	版本		1
		36	版本		1
		37	掛軸	明治36	1
		38	幟	明治25	1
		39	幟	明治27	1
		40	宿帳		1
コーナー4 田中村	日光院	41	聖觀音菩薩坐像	文化4	1
		42	觀音講宿帳	昭和50	1
		43	名簿	昭和18	1
		44	御神水		1
		45	祈拂神符		1
		46	代參簿		1
		47	木箱	明治44	1
		48	棟札	昭和6	1
		49	宿帳	明治9	1
		50	寄進札		2
コーナー4 田中村	志引觀音堂	51	三重塔レプリカ		1
		52	宮城郡八幡色天童氏屋敷ならびに 家中・足輕屋敷絵図	天和元年	1
		53	木箱	大正14	1
		54	掛軸		1
		55	宿帳	昭和29	1

### 3 普及啓発活動

#### (1) 普及啓発活動概要

埋蔵文化財調査センターが主催した普及啓発事業としては、速報展の関連企画として平成31年度の发掘調査成果を紹介した遺跡調査報告会、企画展のテーマである多賀城碑を共通の主題とした歴史講座を開催した。史遊館が主催した普及啓発事業としては、まが玉づくりなどの通常体験を実施した。講演会等の発表依頼については、新型コロナウィルス感染症の影響もあり、平成30年度は4件、平成31年度は6件あったのに対して、令和2年度は1件のみと少なかった。

各種事業については、新型コロナウィルス感染者数の動向を注視し、実施の可否を判断した結果、例年実施している歴史体験事業「網代編みコースターブル」、「二市三町（本市・塩竈市・利府町・松島町・七ヶ浜町）縄文土器づくり」「三陸自動車道むすび丸春日PAまつり」「文化センターまつり」「親子でつくる鏡餅」は中止となった。

また、例年宮城県考古学会からの依頼により近年の調査成果を速報的に報告している「宮城県遺跡調査成果発表会」については、令和2年度は開催されず、資料集の頒布のみを行われ、西沢遺跡第37次調査の成果を寄稿した。

#### 令和2年度の主な歴史体験事業

開催日	イベント名	
11月1日 ～11月7日	文化財保護強調週間（まが玉）	依頼対応
11月7日	大人のための紫草染め体験	主催
2月22日	大人のための貝殻づくり	主催
3月9日 ～3月20日	クッキー型で多賀城瓦ブローチづくり	依頼対応

#### 令和2年度多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）利用状況

月	開館日数	利用者総数						利用内容内訳		
		一般		高校		小中		計	展示見学	研修授業
		館内	館外	館内	館外	館内	館外			
4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	7	7	0	0	0	3	0	10	9	0
6月	25	79	0	0	0	11	0	90	83	0
7月	27	114	0	1	0	21	0	136	115	5
8月	26	37	0	0	0	22	0	59	27	8
9月	26	43	0	0	0	8	0	51	25	13
10月	27	38	0	0	0	6	0	44	30	2
11月	24	63	0	0	0	27	0	90	48	5
12月	24	39	12	3	0	6	0	60	34	4
1月	24	18	16	0	0	12	3	49	19	4
2月	22	29	0	0	0	7	0	36	14	3
3月	26	53	0	0	0	12	0	65	37	1
<b>合計</b>	<b>258</b>	<b>548</b>		<b>4</b>		<b>138</b>		<b>690</b>	<b>441</b>	<b>45</b>
										<b>204</b>

#### 令和2年度多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）歴史学習実績

月	いつでも体験（有料）										いつでも体験（無料）										イベント等体験 イベント・体験名	館内実績
	新規来館者	既往来館者	巡回企画	定期企画	個別企	巡回企	定期企	新規来館者	既往来館者	巡回企	定期企	新規来館者	既往来館者	巡回企	定期企	新規来館者	既往来館者	巡回企	定期企	新規来館者		
4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
5月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
6月	0	2	0	3	0	0	0	2	0	0	7	7	0	4	0	0	0	0	0	4	4	
7月	5	0	1	0	1	0	2	0	1	0	5	0	15	15	0	4	0	1	2	0	0	
8月	5	0	5	0	3	0	0	0	0	5	0	18	18	0	17	0	0	7	0	24	0	
9月	5	0	10	0	4	0	0	0	0	0	0	19	19	0	1	0	1	0	0	0	2	
10月	5	0	12	0	0	0	1	0	0	0	2	0	20	20	0	0	0	0	0	0	0	
11月	11	0	8	0	1	0	1	0	2	0	4	0	27	27	0	1	0	0	0	1	1	
12月	3	0	5	0	1	0	0	12	3	0	0	0	24	12	12	0	0	0	0	0	0	0
1月	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	0	7	7	0	0	0	0	0	0	0	0
2月	6	0	2	0	0	0	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3月	7	0	2	0	1	0	2	0	2	0	6	0	20	20	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	59	50	0	14	0	8	12	10	25	0	169	157	12	27	0	2	9	0	0	38	28	0
合計	50	50	14	20	10	25	169	314	24	27	2	9	0	0	0	38	38	0	0	33		

## (2) 歴史学習

史遊館が主催する歴史学習事業については、通常体験としてまが玉づくり、縄文カゴづくり、貝絵付け、横笛づくり、らでんマグネットづくり、火おこし体験、拓本体験、貝合わせ、かるた、ぬりえを実施した。また、歴史体験事業として、「大人のための紫草染め体験」、「大人のための貝雑づくり」を開催した。更に、つながる湾プロジェクトからの依頼事業として、「クッキー型で多賀城瓦ブローチづくり」を開催した。

新型コロナウィルス感染症による緊急事態宣言期間が明けた5月24日の再開以降の歴史体験事業実施にあたっては、感染症予防のため、原則として同時利用人数を5名以下とし、受付時の検温や密集・密接回避のための分散着席の実施、使用前後の用具・机等の消毒および1時間ごとの換気を徹底して行った。また、原則予約制を導入し、体験可能時間を4つの時間帯各1時間(①9時～②11時～③13時～④15時～)とすることで、入館制限の徹底及び消毒や換気の時間を十分にとれるよう配慮した。さらに受付にアクリルパネルの衝立を設置する、金銭の授受にはトレーを使用する、解説員はマスクを着用して対応するなどの対策を実施した。

埋蔵文化財調査センター改修工事のため、3階体験学習室を埋蔵文化財調査センター臨時事務室したことから、8月22日以降の体験学習は2階ボランティア室でおこなった。部屋の床面積が埋蔵文化財調査センター展示室の1/3以下であることから、最大収容数は5人として運用している。なお、大人のための紫草染め体験は火気を使用することから、多賀城市中央公民館の調理実習室を借りて実施した。

令和2年度の史遊館利用者数は総数690名であり、1日あたりの平均人數は約2.6名であった。団体予約の受付を中止した結果、小中学校の学年単位での利用がすべてなくなつたため、利用者数が大幅に減少している。個人の来館者は速報展を開催していた6・7月および人気のある歴史体験事業開催月が多い結果となった。



大人のための紫草染め体験



大人のための貝雑づくり体験



多賀城瓦ブローチづくり体験

## (3) 遺跡調査報告会

名 称：多賀城市遺跡調査報告会－平成31年度の調査成果－

開催日時：令和2年6月27日（土）

午後1時30分～午後3時30分

会 場：多賀城市文化センター第3・4会議室

参加人数：29人

内 容：当センターが実施したほ場整備事業に伴う発掘調査

（山王遺跡第178・198次調査）、山王遺跡第211次・  
214次調査、西沢遺跡第37次調査成果を報告した。



報告会の様子

#### (4) 歴史講座

名 称：令和2年度歴史講座 受講者数：35人（延べ141人）

内 容：令和2年度企画展「多賀城碑が映す古代東北と北方世界」に関連し、「多賀城碑と東北古代の諸問題」をテーマに、全5回の講座を開催した。

#### 令和2年度歴史講座開催一覧

回	開催日	時間	内容	担当講師	会場
第1回	11月6日(金)	14:00～15:30	多賀城碑が映す古代東北と北方世界	埋蔵文化財調査センター 副主幹 千葉孝弥	中央公民館 第3・4会議室
第2回	11月13日(金)	14:00～15:30	多賀城碑 -保存と江戸時代の認識-	埋蔵文化財調査センター 普及啓発専門員 濱川ちかこ	中央公民館 第3・4会議室
第3回	11月20日(金)	14:00～15:30	陸奥国の海道と山道	東北学院大学 教授 永田英明 氏	中央公民館 第3・4会議室
第4回	11月28日(土)	14:00～15:30	飛鳥時代の陸奥国府	仙台市教育委員会事務局 文化財課長 長島栄一 氏	中央公民館 第3・4会議室
第5回	12月4日(金)	14:00～15:30	企画解説	埋蔵文化財調査センター 普及啓発専門員 濱川ちかこ	埋蔵文化財調査センター展示室



講座の様子



企画展解説の様子

#### (5) 刊行物

多賀城市埋蔵文化財調査センターワン報－平成31年度－

多賀城市文化財調査報告書第146集 新田・山王・高崎・西沢遺跡ほか

－震災復興関係遺跡発掘調査報告書II－

多賀城市文化財調査報告書第147集 多賀市の歴史遺産 南宮村・山王村

多賀城市文化財調査報告書第148集 多賀城市内の遺跡2－令和2年度ほか発掘調査報告書－

新田遺跡・山王遺跡・高崎遺跡・志引遺跡・大代遺跡

多賀城市文化財調査報告書第149集 新田遺跡ほか 新田遺跡第143次調査・山王遺跡第222次調査

市川橋遺跡第100次調査・高崎遺跡第124次調査

#### (6) 講演会等への協力

開催日	題目	事業の名称	主催団体
令和2年11月7日	プラサンノウ	山王歴史講座	山王地区公民館

#### (7) 研究発表、執筆など

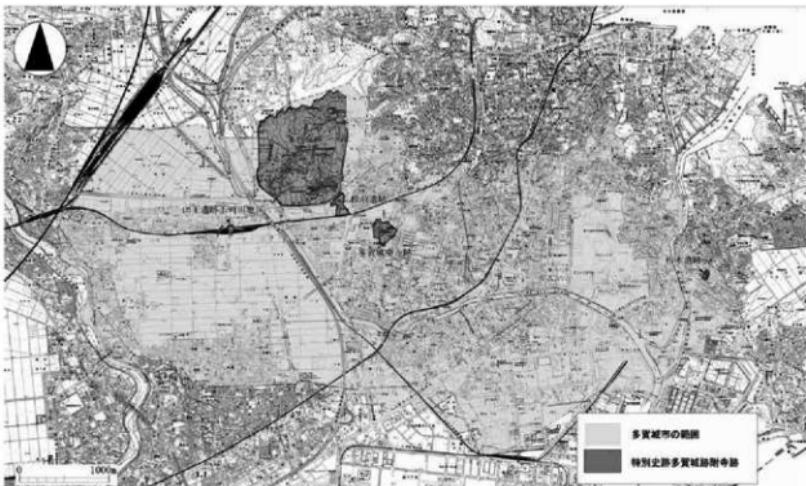
題目・誌名	依頼団体
『西沢遺跡第37次調査』 『令和2年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』	宮城県考古学会

## 4 指定文化財保護

### (1) 特別史跡多賀城跡附寺跡の保存活用

#### ①保存管理計画

特別史跡多賀城跡附寺跡は、多賀城跡、多賀城廃寺跡、館前遺跡、柏木遺跡、山王遺跡千刈田地区の5遺跡からなっている。指定面積は約 107.7 ha であり、特別史跡を含めた市内遺跡約 564.4 ha の 1/5 を占めている。



特別史跡多賀城跡附寺跡の位置図

特別史跡の現況をみると、柏木遺跡・山王遺跡千刈田地区は、指定範囲の全てが史跡公園として整備されている。一方、多賀城跡・多賀城廃寺跡・館前遺跡についてみると、公有化した範囲では史跡公園としての整備が逐次進められているものの、未整備のままとなっている箇所も多い。私有地については、多賀城跡では宅地・田畠・山林、多賀城廃寺跡と館前遺跡では宅地・畑となっている。

本市では、昭和 51 年（1976）に『特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画』を策定し、特別史跡の現状変更に関する基準の明確化と私有地の計画的な公有化を掲げ、史跡の適切な保存管理の施策を明らかにした。昭和 63 年（1988）には特別史跡の保存管理に加え、整備活用の施策を加えた『特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書』を策定し、現状保存に止まらず、積極的に文化財としての価値を高め、地域住民をはじめとして国民が親しみ活用することを、保存管理の基本理念とした。

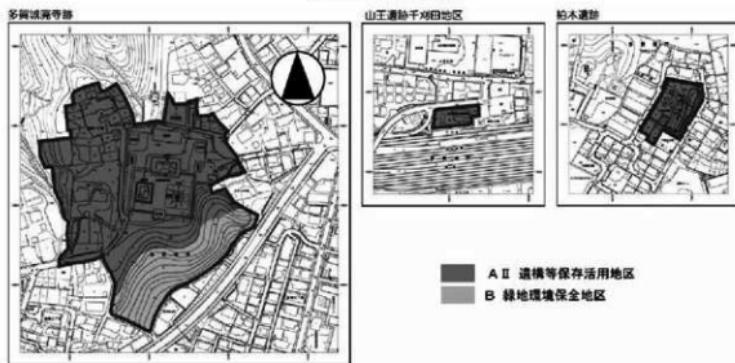
さらに、平成 23 年（2011）に策定した、『特別史跡多賀城跡附寺跡第 3 次保存管理計画』では、第 2 次保存管理計画を継承しつつ、地域住民との共存・共営及び市民協働による保存管理・整備活用の観点を新たに加えたものとなっている。

第 3 次保存管理計画の期間については、策定後 10 年間の時限的なものとしているが、東日本大震災後の環境の変化、特に復興のシンボルとしての多賀城南門の立体的復元整備事業を開始したことにより、特



S 重点遺構保存活用地区	B 緑地環境保全地区
A I 遺構等保存活用地区	C 湿地環境保全地区
A II 遺構等保存活用地区	

多賀城跡の地区区分図



多賀城废寺跡・山王遺跡千刈田地区・柏木遺跡の地区区分図

## 特別史跡多賀城跡附寺跡地区区分一覧

★ 優先的・計画的に公有化

		特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画		
		第1次 (昭和51年度～)	第2次 (昭和63年度～)	第3次 (平成23年度～)
多賀城跡			★ A I 整備活用地区	
	★ 遺構保護整備地区		★ A II 整備活用地区	
	集落保存地区		A 遺構等保存活用地区	
	山林緑地保存地区		B 緑地環境保存地区	
	住居地区		C 濡地環境保全地区	
保護活用施設設置地区				
多賀城庵寺跡	遺構保護整備地区	A 2 整備活用地区	A 遺構等保存活用地区	A II 遺構等保存活用地区
	山林緑地保存地区	山林緑地保全地区	B 緑地環境保存地区	
	住居地区			
館前遺跡	遺構整備活用地区	A I 整備活用地区	★ S 重点遺構保存活用地区	
		A 2 整備活用地区	A 遺構等保存活用地区	A II 遺構等保存活用地区
		湿地環境保全地区	C 濡地環境保全地区	
柏木遺跡			A 遺構等保存活用地区	A II 遺構等保存活用地区
山王遺跡千刈田地区			A 遺構等保存活用地区	A II 遺構等保存活用地区

別史跡の活用に加え、地域住民との関わりについて新たな視点が必要であると捉え、計画期間を延伸し、地区住民と連携のもと策定することとしている。

なお、特別史跡の取扱いについては、昭和 60 年（1985）に宮城県と覚書を取交しており、発掘調査及び史跡整備については宮城県、土地の公有化と公有化した土地及び宮城県が整備した範囲の経常的な維持管理は多賀城市が行うこととしている。

また、平成 28 年度から令和 11 年度までの間の時限的措置として、多賀城南門地区・南辺東地区・館前地区・政府地区北端部について、本市が整備事業を実施することとしている（宮城県教育委員会『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』2016）。

## ②令和 2 年度の事業内容

特別史跡の公有化事業、維持管理事業、普及啓発事業を実施した。

### ・特別史跡の公有化事業

特別史跡の適切な保存と効果的な活用を図る目的で、昭和 38 年度（1963）以降、継続的に特別史跡内にある私有地の公有化事業を実施している。

事業着手当初は、土地所有者からの買取り請求に沿って公有化を行っていたが、昭和 51 年の保存管理計画策定の際に 5 つの地区区分を設け、このうちの「遺構保存整備地区」・「保存活用施設設置地区」について、計画的且つ積極的な公有化を図ってきた。第 2 次保存管理計画では地区設定を 4 地区に改め、「A

「A 1 遺構整備活用地区」・「A 2 遺構整備活用地区」の公有化を優先的に実施し、現行の第3次保存管理計画では5地区に整理した地区区分のうち、「S 重点遺構保存活用地区」及び「A 1 遺構等保存活用地区」の2地区を計画的な公有化の範囲とし、それ以外の地区は土地所有者の申出があった場合及び公共公益上必要が生じた場合に公有化を行うこととしている。

令和2年度末現在で特別史跡内に私有地が所在しているのは、史跡を構成する5遺跡のうち、多賀城跡、多賀城廬跡、館前遺跡の3遺跡である。このうち、令和2年度は、多賀城跡に所在する私有地5,587.33m<sup>2</sup>の公有化を行い、公有化した特別史跡の面積は647,237.15m<sup>2</sup>（約64.7ha）、公有化率は60.11%となっている。

#### ・維持管理事業

公有地及び史跡として整備された範囲の維持管理を、継続的に実施している。

直営で史跡管理員を雇用し、多賀城政府跡の北東側にある多賀城跡管理事務所を拠点に、史跡内の巡視、除草、支障樹木の伐採、植栽剪定、病害虫駆除等、多岐にわたる特別史跡の維持管理を行っている。

一方、公有化が進み史跡整備された範囲が広がるとともに、公有地内での未整備地区も増加している。このため、公有地全ての維持管理を直営で行うことは不可能であることから、地元後継者団体等に除草業務を委託するなどし、史跡の環境維持に努めている。

#### ・普及啓発事業

多賀城跡の歴史的価値を子供たちに知ってもらうため、地元にある市立城南小学校の5・6年生を対象に、特別史跡内での歴史的食文化体験学習を実施している。この食文化体験学習は、公有化した土地の有効活用に加え、地元小学生が多賀城を理解する絶好の機会となっている。

食文化体験学習は、多賀城南門西側の湿地環境保全地区で実施している、5年生を対象とした古代米の「田植え→稲の生長観察→稲刈り」と、政府北東部のA 1 遺構等保存活用地区で実施している、6年生を対象とした蕎麦の「種まき→刈取り」があり、収穫した米や蕎麦は児童の食体験で活用されている。

なお、古代米については、多賀城跡や南面の市川橋遺跡から、「黒春米」と記された荷札木簡が出土しており、国府に米が納められていたことが明らかである。また、多賀城南面に施工された都市域の外側では古代の水田跡が発見されており、多賀城跡の周辺では奈良・平安時代にも水稻栽培が行われていたことが確認されている。

一方、蕎麦については考古学的な調査では、史跡も含め市内の遺跡では栽培の痕跡は明らかではないが、700～780cal ADに推定されている多賀城跡鴻ノ池地区（多賀城跡第81次調査）のTG J-2帯からソバ属が検出されている。蕎麦は『続日本紀』養老六年（722）七月戊子条に「種樹晚禾蕎麥及大小麥 藏置 儲積 以備年荒」とされていることから、奈良時代以降、備荒作物として栽培が奨励されていたことが知られている。また、多賀城周辺における高時間分解の植生復元をおこなった吉田・鈴木は、進藤（2010）の研究成果に基づき、多賀城周辺の沖積平野では、築造後からの急速な人口増加を背景に、水田耕作やソバ栽培などの大規模な農耕を開始したと推測している（吉田・鈴木 2013）。

令和2年度の歴史的食文化体験は、5年生125名、6年生132名を対象に行った。古代米の田植えについては、新型コロナウイルスの影響により中止となったが、稲刈りは10月21日に多賀城市観光協会・市民経済部商工観光課・同農政課・建設部都市計画課の協力により実施した。

なお、当該年度は東日本大震災から10年を迎えるにあたり、被災した自治体が選んだ花や農作物の種

全体図 令和2年度特別史跡多賀城跡附寺跡内除草等管理業務箇所図 S = free



凡例



令和2年度史跡内除草箇所図

を宇宙ステーションまで運び、感謝の気持ちを世界中に発信する「東北復興宇宙ミッション2021」が、一般財団法人「ワンアース」により企画された。本市では古代米を宇宙ステーションに届けることとし、収穫した古代米の一部が、本市を含む42市町村（岩手・宮城・福島県）の品とともに、令和3年6月にロケットで打ち上げることとなった。

蕎麦の種まきは、地元団体である多賀城史跡美化研究会協力のもと7月22日に、刈取りは11月6日に多賀城史跡美化研究会、市民経済部商工観光課・同農政課・農業委員会、建設部都市計画課の協力のもとそれぞれ行った。



古代米栽培体験の様子



蕎麦栽培体験の様子

## (2) 多賀城跡復元整備事業（多賀城南門等復元整備事業）

多賀城南門等復元整備事業は、多賀城外郭南辺のおよそ中央に設けられた多賀城南門（以下事業名を南門）及びこれに取り付く築地塀の一部を立体的に復元し、併せて南門の所在する丘陵部の古代地形の修復（修景）を実施するものである。

以下、中核となる多賀城南門復元事業着手までの経過、南門等復元整備事業の概要、令和2年度工事の内容を記載する。

### ①復元整備事業の経過

南門は、政府第II期の外郭中央に位置している。政府から舌状に南に延びる丘陵南端部にあり、5度にわたり南門及びこれに取付く築地塀の調査が、宮城県多賀城跡調査研究所により実施されている。また、発掘調査後は、平面的な遺構表示が行われ、史跡の整備が図られていた。

一方、多賀城南門の位置する南門地区については、平面的な遺構表示を行う一方で、『特別史跡多賀城跡附寺跡第2次保存管理計画書』のなかで、「外郭南門」の実物大復元の方針を明示した。これに基づき、平成3年（1991）に「多賀城跡建物復元調査検討委員会」を設置し、復元対象を政府第II期と定め、平成6年（1994）には復元工事に係る実施設計書が完成した。

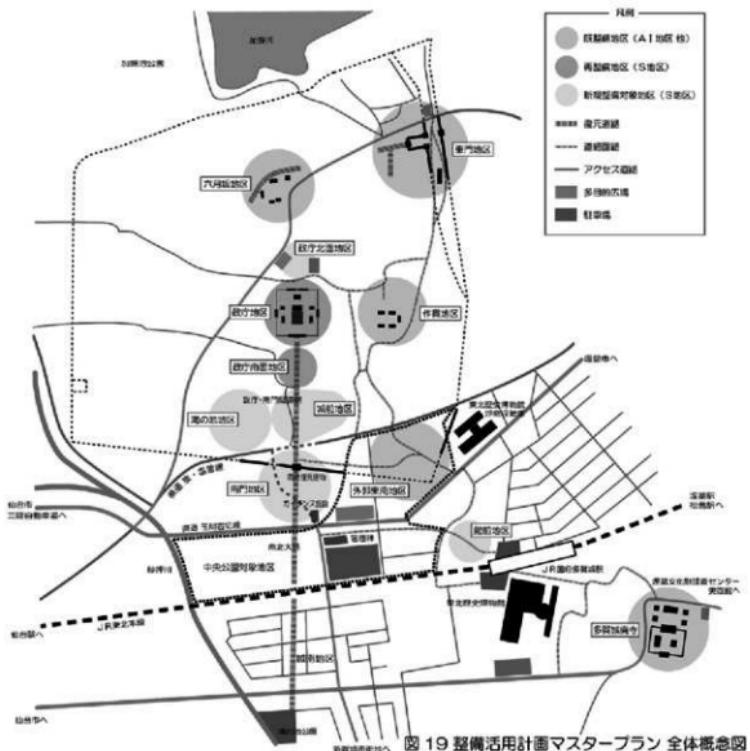
しかし、バブル経済の崩壊に伴う財政状況の変化や、平成6年9月に本市を襲った集中豪雨災害への対応が最優先事項となつたことから、復元事業の具体的な着手には至らなかった。

平成23年（2011）7月、『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』を策定し、南門をはじめとした周辺地区的具体的な整備計画を示した。このなかで、管理団体である本市が、主体的に事業を進める方

向性を初めて明記した。

そして、南門の復元事業は、平成23年(2011)12月に『多賀城市歴史的風致維持向上計画』が認定されたことにより、大きく進展した。この計画では南門の復元事業を、本市の歴史的風致を維持・向上させるための最も重要な事業の一つと捉えるとともに、同年3月に発生した東日本大震災からの復興のシンボルとして、市民の復興意識の向上につながるものと位置づけた。

平成24年度には、新たに「多賀城南門等復元整備検討委員会」を設置し、復元に向け本格的な検討を行なった。



整備活用計画マスター・プラン（第3次保存管理計画より）

## 特別史跡多賀城跡附寺跡地区区分一賀

担当	整備事業の分担地区
宮城県	政庁地区、政庁南面地区(※政庁南面地区・城前・鶴池地区) 作賀地区、東門・大畑地区(※東門地区)
多賀城市	南門地区、南辺東地区(※外郭東南地区) 館前地区、政庁地区北端部(※政庁北面地区)

再開した。この新たに設けた委員会では、平成6年に作成した実施設計書の再検証を行うとともに、平成26年（2014）に南門復元に向け宮城県多賀城跡調査研究所が実施した南門地区再調査（第87次調査）で得られた新たな所見を取り入れ、平成6年設計に比べ精度の高い南門復元案が完成した。

この復元案は、平成29年（2017）に文化庁の「史跡等における歴史的建造物の復元の取扱いに関する専門委員会」の承認を受け、平成31年2月より具体的な実施設計作業に着手した。

なお、この間、宮城県教育委員会では、『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』を受け、平成28年（2016）3月に『特別史多賀城跡附寺跡整備基本計画』を策定した。この中で、計画期間中（平成28～41年度（令和11年度））の整備事業の分担が示されるとともに、多賀城創建1300年の節目となる令和6年（2024）までに、S重点遺構保存活用地区の中軸となる政府地区から南門地区の整備完了及び一般公開を目指すことが明記された。

復元工事は、令和元年（2019）10月の工事請負契約締結後、直ちに仮設工事に着手する予定であったが、同時に発生した台風第19号の影響により、12月まで遅れることとなった。仮設工事が完了した令和2年4月から、南門及び近接する築地塀をはじめ、現存する遺構を養生するための盛土工事に着手した。盛土が安定した6月からコンクリートによる基壇工事を行い、10月から南門の木工事を開始し、令和3年3月末時点で二重頭貫の組立まで達している。

## ②復元整備事業の概要

本市が実施する多賀城南門等復元整備事業は、政府第Ⅱ期の南門及びこの東西に取り付く築地塀の復元、政府南大路及び南北大路の復元、南門が所在する丘陵の地形修復、ガイダンス施設建設、政府地区北端部の広場整備である。

これに、建設部復興建設課（令和3年度から道路公園課）が主体となる多賀城市中央公園整備事業、宮城県多賀城跡調査研究所が主体となる政府南大路の復元的整備事業及び城前地区官衙エリアの遺構表示整備事業が一体となり、多賀城創建1300年となる令和6年（2024）の一般公開を目指している。

## ③令和2年度の工事内容

多賀城南門復元工事、築地塀実施設計、南門周辺地形修復実施設計、ガイダンス施設設計を実施した。

南門復元工事は、令和元年10月の台風第19号による山林被害の影響により、平成30年度事業、平成31年度事業を当該年度に実施することとなった。平成31年（令和元年）度より継続していた遺構の養生盛土が終了した後、令和2年6月にコンクリート基壇工事、8月に礎石据付けを行い、令和2年10月～令和3年1月にかけて初重柱の組立～初重地垂木・面戸板・木負までの木工事を実施した（平成30年度縦越事業）。この間、施工業者により、令和2年6月7日に起工式、令和2年10月8日に立柱式が執り行われた。令和3年2月からは、初重飛檐垂木の組立を開始し、令和3年3月までに二重柱の頭貫まで完成した（平成31年度縦越事業）。

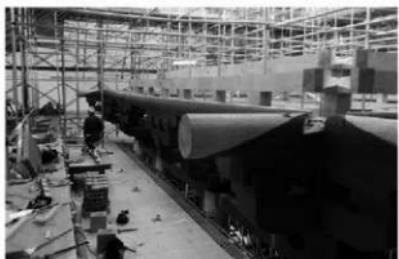
なお、10月10日、一般を対象に「多賀城跡南門建設現場見学会」を開催した。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、県内居住者限定で且つ1回あたりの見学人数を制限した事前申込み制で実施し、市内外から100人の参加があった。



原寸検査の様子



石工事の様子



木工事の様子



立柱式の様子



見学会の様子



現地での体験学習の様子



南門復元イメージ

### (3) 名勝おくのほそ道の風景地の保存活用

名勝おくのほそ道の風景地は、松尾芭蕉（1644～1694）が記した紀行文『おくのほそ道』に登場する歌枕の地や名所旧跡のうち、今も良好な風致景観が維持されている場所が指定されている。

本市においては、「壺碑」・「興井」・「末の松山」・「野田の玉川」の歌枕が紀行文に登場するが、このうち「壺碑」・「興井」・「末の松山」が平成26年（2014）10月、名勝おくのほそ道の風景地「壺碑（つぼの石ぶみ）・興井・末の松山」として名勝指定を受けたものである。

「壺碑（つぼの石ぶみ）」は、西行の『山家集』などに見られる歌枕である。多賀城南門及び多賀城碑が位置する丘陵地が比定されており、丘陵一帯が指定範囲となっている。

「興井」は『古今和歌集』小野小町の歌や『千載和歌集』二条院讃岐の歌など、「末の松山」は『御拾遺和歌集』清原元輔の歌などで知られる。いずれも、市内八幡二丁目にある住宅地内に所在している。

平成28年（2016）3月、本市では、これら3箇所の指定地の保存活用の目的及び運営の基本方針を示した『名勝おくのほそ道の風景地「壺碑（つぼの石ぶみ）・興井・末の松山」保存活用計画』を策定し、各指定地保護のための整備事業を計画している。

このうち、「興井」・「末の松山」は、平成28年10月に変更計画が認定された『歴史的風致維持向上計画』で歌枕環境整備の一環として事業が計画され、平成29～令和2年度にわたり、建設部都市計画課で、来訪者の滞留スペースの設置、水質改善の導水工事、竹垣風フェンス設置工事等を実施したほか、興井の道路沿いに設置した転落防止用のフェンスについては、文化財課が竹で被覆し、江戸時代の絵図に描かれた風情を体感できるように修景作業を行った。

一方、壺碑の環境整備については、特別史跡多賀城南門等復元整備事業に大きく影響されるものであり、史跡と名勝それぞれの調和が図れるよう、十分に調整することとしている。

なお、この3か所の指定地は、平成28年4月25日に認定された、日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の構成文化財となっていることから、「伊達」な文化魅力発信推進事業の一環として、仙台市、塩竈市、松島町の構成文化財とデザインが統一された、多言語に対応

した説明板を設置した。



説明板・フェンス等を整備した興井



説明板・舗装等を整備した末の松山

## 5 資料管理

### (1) 資料の貸出及び掲載

依頼機関等	依頼（貸出理由）	貸出期間	資料名
東北歴史博物館	総合展示室中の展示に利用するため	R2.4.1 ～R3.3.31	新田遺跡出土資料 天豆茶碗、かわらけ（在地系）、かわらけ（京都系） 折鉢、漆器、下駄、草履、小柄、轡 各1点
奥州市埋蔵文化財調査センター	ホームページ「うらの山長のときどきブログ」掲載記事に使用のため	R2.7.31	山王遺跡出土「うらの山長のときどき」 市川橋遺跡出土「山墨書士器」写真6点
特定非営利活動法人北海道NPOサポートセンター	情報誌『からから便り』掲載のため	R2.7.27	市川橋遺跡出土「山墨書士器」写真1点
名取市歴史資料館	企画展「一時里帰りした山岡古墳のお宝」展示用タル掲載のため	R2.8.21	大代6号横穴墓出土頭椎大刀 写真1点
最上義光歴史館	教育目的映像掲載のため	R2.10.28	天童家大馬印・小馬印 写真1点
(株)東北新社プロモーション プロデュース事業部	お城情報WEBサイト「城びと」での連載記事（古代城郭教室）への掲載のため	R2.10.28	館前遺跡復元模型 写真1点
個人	奈良開創特別古縁「本能寺の魔 神君伊賀越の真相」「和泉因幡為稱・織部房長の事蹟紹介」記事掲載のため	R2.12.1 R3.1.10	和田氏開創遺跡復元模型 1点
塙町郷土資料館	企画展「[3.11東日本大震災 オペレーション・トモダチ—仙台空港の容疑—]」でのスライド映写	R3.3.11 ～3.28	平成29年7月30日開催歴史民俗博物館開催の特別集合 「被災地の博物館に聞く」における本作報告「東北地方 太平洋地震による文化財被害と接続活動」 で使用した画像 1枚
つながる青プロジェクト	機関紙『うみねこ通信』及びホームページへの掲載	R2.3.26	鶴岡貝塚出土庄屋埴土器 写真1点 山王遺跡の水田跡 写真1点 多賀城海軍工廠設置設置図 1点
旭ヶ岡町内会	旭ヶ岡町内会だよりに掲載する地区的変遷に関する特集記事に使用するため	R3.3.26	池駐車料金の宿舎 写真1点 鈴木理 写真1点 旭ヶ岡町内会 写真1点

### (2) 資料調査の受け入れ

年月日	調査機関	目的	調査対象資料
令和2年7月14日 12月1日 ～12月3日	個人	論文執筆のため	山王・市川橋遺跡出土縄輪陶器 一式
令和2年7月28日 ～7月30日	個人	論文執筆のため	八幡沖遺跡出土土器121点
令和2年10月1日	個人	論文執筆のため	山王遺跡出土石製模造品 一式 新田遺跡出土土器・石製模造品 一式

### (3) 収集（寄贈）資料

資料名	品目	数量	寄託・寄贈元	年代	備考
民俗資料	焚アイロン 1点 火のし 1点	2	個人		
考古資料	多賀城庵寺跡瓦	1	個人		
考古資料	土器・石器等	82	山王小学校	縄文～古代	市川、多賀城、新田七北田川、加瀬沼、 塩釜小松崎、御藏場の注記あり。
考古資料	瓦	40		古代	昭和10～17年の注記あり
民俗資料	わらじ、草履、足半、萬ぐつ	4			
古生物資料	化石	32			
その他	考古資料レプリカ等	7			

### (4) 出土資料の保存処理

木・鉄製品等脆弱遺物について、劣化防止及び形状保持のため、収蔵資料の保存処理を行った。木製品については、市単独で借り上げているPEG含浸装置を用いて、木製品60点の保存処理を施した。まずEDTAを用いた脱色処理を行ったのち、50%のPEG溶液に資料を浸し、徐々に濃度を上昇させ、製品中に含まれる水分とPEGを置換した。また、市川橋遺跡出土柱材等5点については、直営での処理が困難であることから、専門の処理施設を有する業者に委託し、PEGを用いた真空凍結乾燥法での処理を施した。鉄製品については、鉄斧や鐵鎌等の出土遺物30点について、錆取り処理ののち、脱塩処理を行い、化剤を用いて形状の補強を行った。

## 6 事務報告

### (1) 埋蔵文化財調査センター改修事業

平成31年度から埋蔵文化財調査センターは、公共施設等総合管理計画に基づき、開館から30年経ち、経年劣化した施設の改修工事を実施した。平成31年度は、1階収蔵庫、2階収蔵庫、2階常設展示室、空調設備、電気設備等の改修工事を行った。令和2年度は、埋蔵文化財調査センター3階部分の改修工事を行い、3階研究室、第2整理室、収蔵展示室2階、電気設備、空調等機械設備工事などを実施した。今年度の工事で改修事業は終了した。

#### ①建築工事

- ・3階研究室・第2整理室・休憩室等のレイアウト変更、それに伴う内装改修工事
- 建具改修工事（木製建具撤去8箇所、木製建具設置4箇所）
- 塗装改修工事（廊下壁吹付タイル塗替、書庫等壁EP塗装）
- その他工事（アルミパーテイション設置、ガラスパーテイション設置、廊下手摺り設置  
(第2整理室家具設置)  
(研究室受付カウンター設置)  
(倉庫兼更衣室木製棚設置)
- ・収蔵展示室2床貼替

#### ②電気設備工事

- 電灯設備改修（照明器具更新、誘導灯更新、非常照明等更新、電灯分電盤更新）
- 動力設備改修（動力分電盤更新）
- 情報通信網設備新設（LANケーブル配線、HUB収納箱設置）
- 拡声設備改修（スピーカー更新）
- 火災報知設備改修（自動火災感知器更新）

#### ③機械設備工事

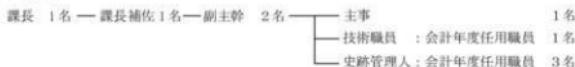
- 空調設備改修（ヒートポンプマルチエアコン更新）
- 換気設備改修（ダクト等改修）
- 給水設備改修（配管、保温材等改修）
- 給湯設備（配管、保温材等改修）
- 消火設備（スプリンクラーヘッド撤去再設置）

(2) 令和2年度埋蔵文化財調査センター事業費内訳(実績)

事業名	支出額 (円)	内 容
開発協議調整事業	291,172	埋蔵文化財の取り扱いに係る事務事業
出土品等整理保存(市単独)	195,088	市内遺跡出土木製品・金属製品保存処理
出土品等整理保存(国庫補助)	3,063,676	市内遺跡出土木製品・金属製品保存処理 補助関係庶務事務
埋蔵文化財緊急調査事業(市単独)	4,003,381	試掘・確認調査 公共事業・小規模開発関係調査
埋蔵文化財緊急調査事業(国庫補助)	19,298,158	市内遺跡発掘調査
埋蔵文化財受託事業	31,565,515	民間の開発行為伴う市内遺跡発掘調査
埋蔵文化財緊急調査事業(復興交付金)	17,220,072	東日本大震災に伴う市内遺跡発掘調査
埋蔵文化財受託事業(ほ場整備)	57,380,834	ほ場整備事業に伴う市内発掘遺跡調査
収蔵資料整理保存事業	593,020	年報作成・書籍管理・データ入力
展示・報告会等開催事業	2,111,369	連報展・企画展・資料展等の開催 報告会・講演会等開催
埋蔵文化財調査センター体験館 管理運営費	4,138,072	体験館の施設維持・管理
埋蔵文化財保存活用整備事業	557,909	収納写真等整理
歴史講座開催事業	33,277	歴史講座開催
埋蔵文化財調査センター改修事業	157,860,780	埋蔵文化財調査センター大規模改修
歴史遺産保全事業	1,548,812	歴史遺産調査
埋蔵文化財調査センター庶務事務	16,908,777	埋蔵文化財調査センター運営
全国公立埋蔵文化財センター 連絡協議会推進事業	15,000	総会・研修会等参加、年会費
合計	316,784,912	

(3) 組織・職員体制

文化財課



埋蔵文化財調査センター



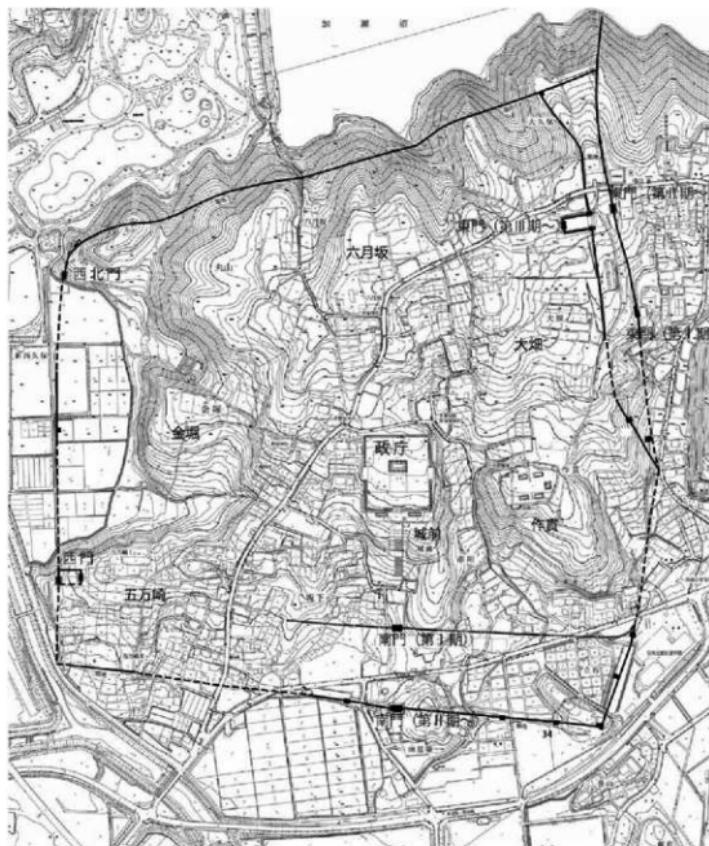
(令和3年12月現在)

## 多賀城南門等復元整備事業の実施設計について

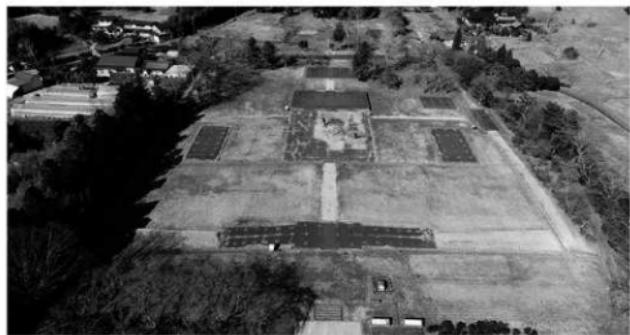
武田 健市

### はじめに

多賀城は奈良・平安時代の陸奥国府であり、奈良時代には鎮守府も併せ置かれた。東辺 1050 m、南辺 870 m、西辺 660 m、北辺 780 m の範囲（外郭）を築地塀や材木塀で区画し、中央部に南北 116 m、東西 103 m の築地塀で囲まれた政庁が位置している。政庁と外郭間に点在する緩斜面上には 6 カ所の実務官衙（曹司）が確認されているほか、政庁と外郭南門間に政庁南大路、外郭東門と西門の間には東西方向の城内道路の存在が推測されている（第 1 図）。



第 1 図 多賀城跡全体図



第2図 多賀城政庁航空写真



政府Ⅰ期(724～762)　政府Ⅱ期(762～780)　政府Ⅲ期(780～869)　政府Ⅳ期(869～11世紀中頃)

第3図 多賀城政府変遷図

政庁は大きく4時期の変遷（I→IV期）で捉えられている。内部の基本的な構成要素は東西棟の正殿、南北棟の東西脇殿、広場、南門、築地であり、これに各時期で構造物が付加されている（第2・3図）。

多賀城跡では、おおよそ政庁から外郭南門間の地区を「S重点遺構保存活用地区」と位置付け、多賀城が最も豪壮であったとされる政庁第II期を基本とした史跡整備を進めている（『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』（多賀城市教育委員会 2011）、『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』（宮城県教育委員会 2016））。現在、本市が整備を進めている多賀城南門は、外郭南辺中央で発見された礎石式八脚門である。政庁第II期以降、多賀城廃絶までおよそ同位置にあり、まさに国府多賀城の入口として機能していたことが明らかである。

多賀城南門等復元整備事業は、平成3年（1991）の「多賀城跡建物復元調査検討委員会」設置により本格的に開始した。平成6年には特別史跡多賀城跡建物復元工事実施設計書（平成6年実施設計）が完成したものの、同じ年に起きた集中豪雨被害をはじめ、バブル崩壊による経済危機、平成23年の東日本大震災に伴う大津波による犠牲的な被害等により、復元事業は長期間の中止を余儀なくされていた。

しかし、平成24年度に新たに設置した「多賀城南門等復元整備検討委員会」による指導助言のもと、平成6年実施設計の再検証が行われ、平成28年度に現在施工している多賀城南門（以下南門）及び築地塀復元工事の実施設計が完成した。ただし、構造設計については検討に止まっていた。

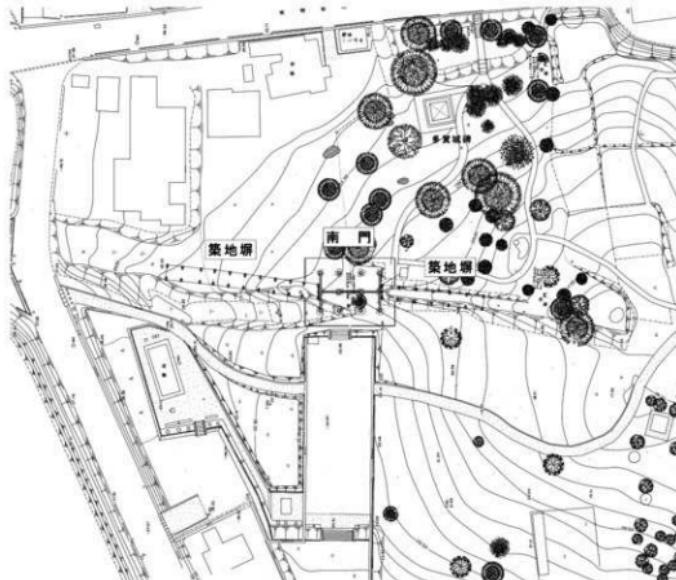
本稿では、平成28年度に作成した「多賀城南門等復元実施設計」の概要について、設計内容の歴史的根拠を一部付記しながら紹介するものである。実施設計は、1 特記仕様書、2 敷地案内図、3 一般図、4 石工事、5 木工事、6 屋根工事、7 左官工事、8 塗装工事、9 金物工事、10 版築工事、11 構造補強工事、12 仮設工事等が記載されており、ここでは各工種について概要を示す。

## 1 特記仕様書

一般共通事項、土工事、木工事、塗装工事など工種別の特記仕様が記載されている。例えば、木工事の原寸引き付けの項目には、「矩計、組物、軒廻り、小屋根、天井、扉廻り等の詳細を確認するため、それぞれ加工前に原寸を引き付けて納まりを検討したうえ、監督職員の承認を得る」と表記され、工事を行う上で実施設計図だけでは判断できないような工程等の詳細が示されている。

## 2 敷地案内図

工事箇所と、現況平面図に南門・築地堀の位置図を示したものである。隣接する道路との位置関係や対象地内の地形、対象地内にある既設建築物や植栽等の配置を示している。



第4図 施工前敷地図



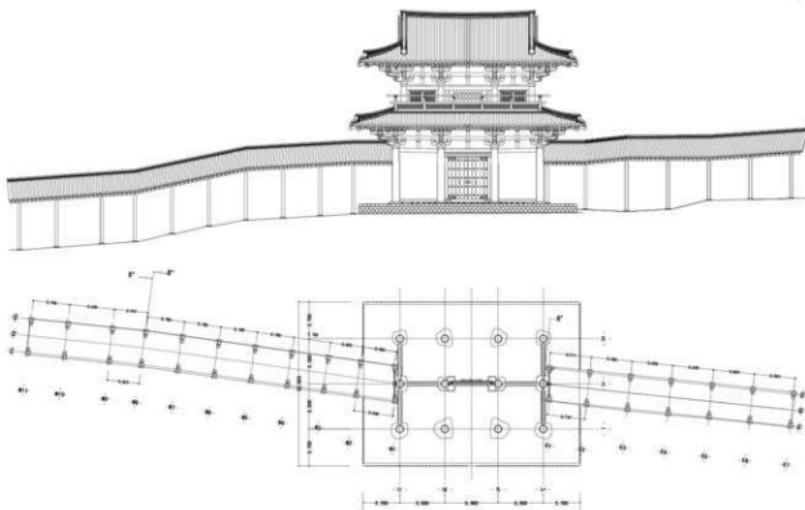
第5図 施工前状況写真



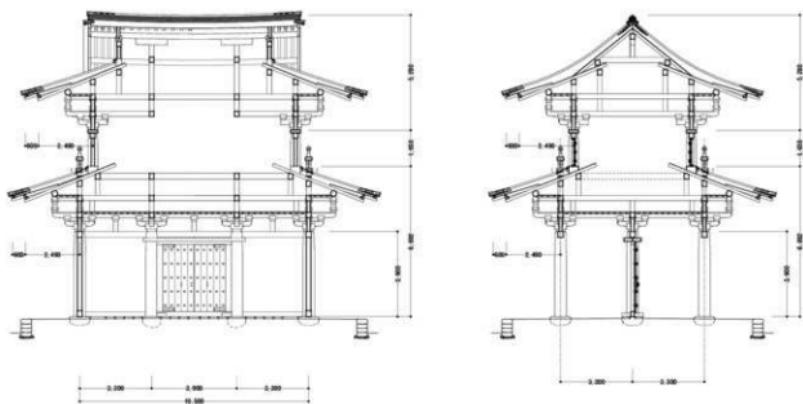
第6図 施工中状況写真

### 3 一般図

南門及び築地塀の平面図、南立面図（正面図）、東立面図（側面図）、梁間断面・桁行断面図である。南門・築地塀の平面図及び立面・断面図により、建築物全体の規模感や完成時のイメージが見て取れる（第7・8図）。



第7図 正面図・断面図



第8図 梁間桁行断面図・築地塀梁間断面図

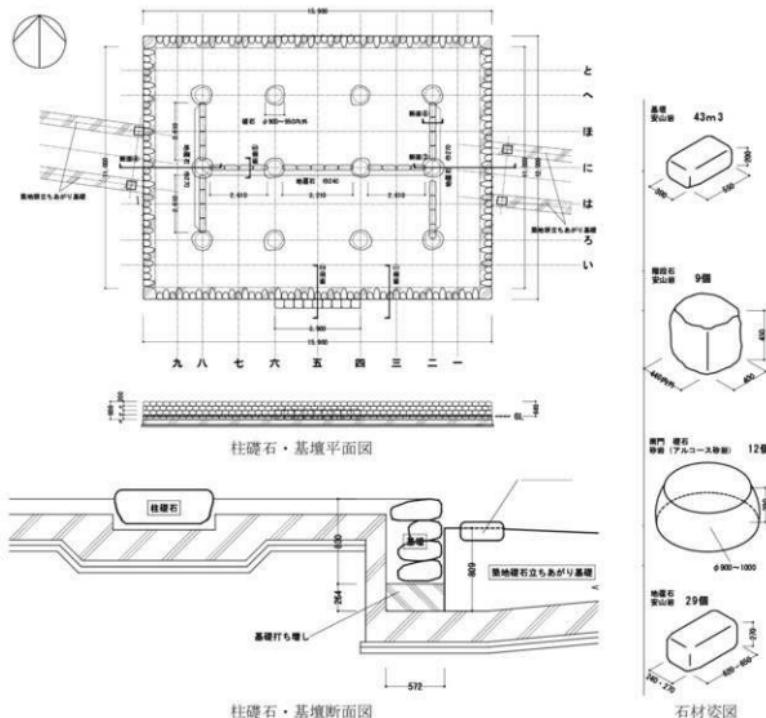
4 石工事図

南門基壇及び築地塀寄柱に敷設される礎石や基壇回り化粧石の配置を示した平面・断面図であり、材質を記載した石材空図も併記されている(第9図)。

基壇及び礎石の位置や規模は、多賀城跡第87次調査成果をもとに復元している。基壇規模は、S X 205・1551 堀込地業及び S X 3240 基壇積土の調査成果から推測された、東西 15.9 m、南北 12.0 mとした。基壇周り化粧石については、政庁正殿第Ⅱ期の S B 150 B 基壇化粧石に玉石が使用されていることから、南門も同様のものと判断した。

礎石の配置については、政庁第II期南門で唯一同残存する据穴A1の東西中心軸と築地塀S F 202 aの中心軸の交わる点を東妻門柱の中心と仮定し、政庁第I期S B 2776南門と同規模の門を配置した際に推測されたものである。基壇の東西中央に配置されることや、東妻及び西妻の門柱と築地塀との間隔が一致することから、妥当であると判断した。

礎石の配置が定まることにより、南門の平面規模は桁行3間(東西10.5m、中央間3.900m、脇間3.300m)、梁行2間(南北6.6m、梁間3.300m)の三間一戸門で復元することに決定したものである。



第9回 石工事回

## 5 木工事

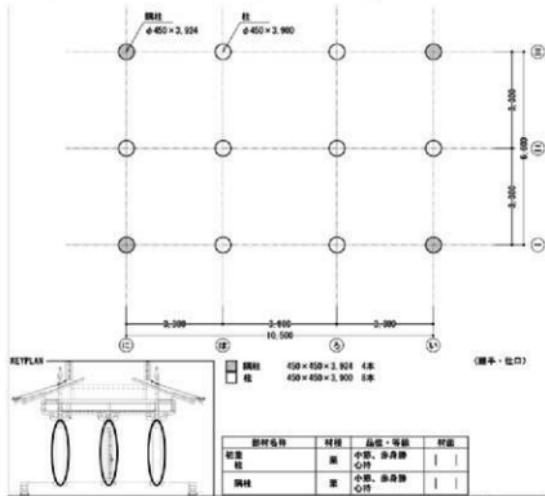
南門では初重柱から二重野地板・化粧裏板・高欄等、築地塀では寄柱から小屋組化粧裏板・茅負までの木工事伏図が、組立工程単位に示されている。また、特記仕様書にも記載のとおり、木工事については原寸図を作成したのち、工事に着手している(第10~13図)。

一方、南門の上屋構造及び築地塀の小屋組み構造については、厳密には不明と言わざるを得ないところであるが、発掘調査の成果及び建築学的な考察により、下記のように理解することとした。

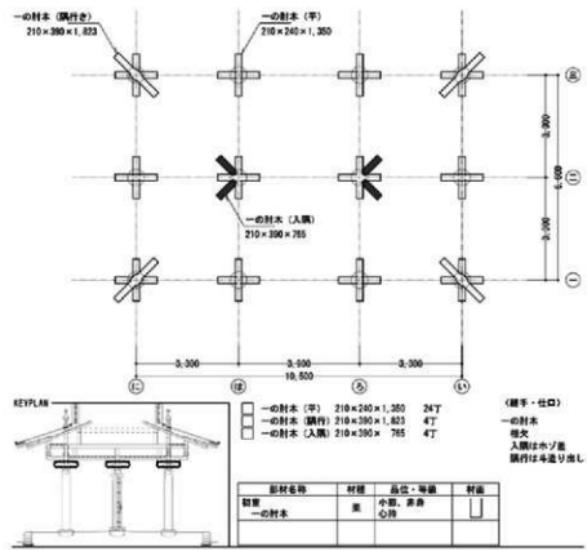
南門については、推定した隅柱の位置と基壇までの距離から、軒の出が9尺(2.7m)以上であることや、平・妻側いずれも同じ距離であること、時代及び建築規模的な侧面から、二手先組物を用いた入母屋造の重層門であると推測された。さらに、第Ⅱ期の政庁南門が翼廊の付く楼門であると推測されていることから、『伴大納言絵詞』にみられる平安宮朱雀門と会昌門の構造の違いなどを参考に、政庁南門より格式の高い二重門で復元することに決定した(第7図)。

二重門で復元するにあたり、小屋組みの基本構造は、現存する唯一の奈良時代の二重門である法隆寺中門に倣いつつ、部材の寸法やプロポーションについては中・近世の三間一戸二重門や、平城宮朱雀門・大極殿院をはじめ、全国で復元されている古代建築物の先行事例を参考に検証を加え、設計されている(第8図)。一方、初重柱や小屋組みの高さについては、両脇に取付く築地塀の高さとの検証が必要であったため、設計に多くの時間を要した。結果、初重柱は高さ3.9m(四隅は隅延びを表現するため3.928m)、直径54cm、小屋組みは初重軒先の高さが5.7mに決定した。

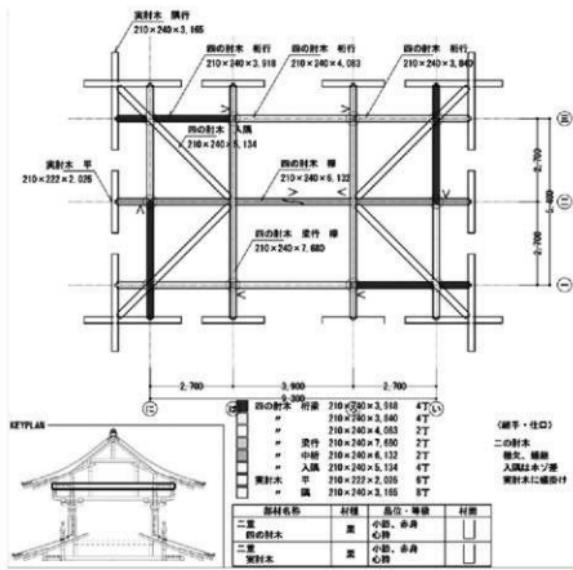
なお、柱材の樹種については、東北地方で発掘された据立柱建物跡及び橋跡の柱材のうち、古代(7~10世紀)のもの253資料を調査した結果、クリを使用しているものが60%にも達していたことが明らかとなった。陸奥国内でもクリが60%を超え、ケヤキが12%で続いている。このことから、南門の柱に使用する樹種については、クリまたはケヤキを使用することとした。



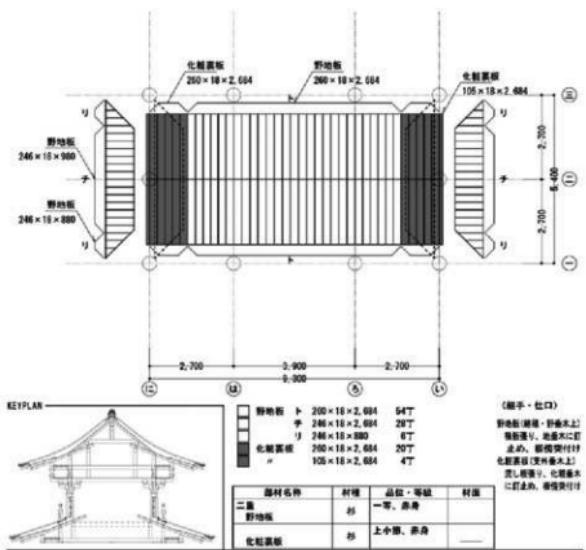
第10図 初重柱・隅柱・地塀・蹴放・唐敷居



第11図 初重 一の肘木

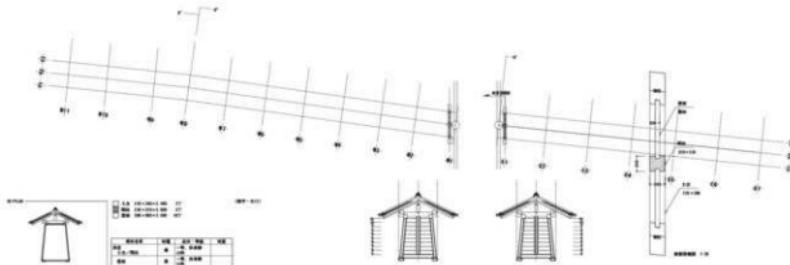


第12図 二重 四の肘木



第13図 二重野地板 化粧裏板

また築地壇については、雨落ち溝など軒の出を推測できる遺構が確認されておらず、小屋組に関する資料は存在していない。現存する基壇幅より、東大寺転害門築地や京都御所築地と同規模であると推測されることから、「東大寺修理材木注進状」に倣い作成している（第14図）。



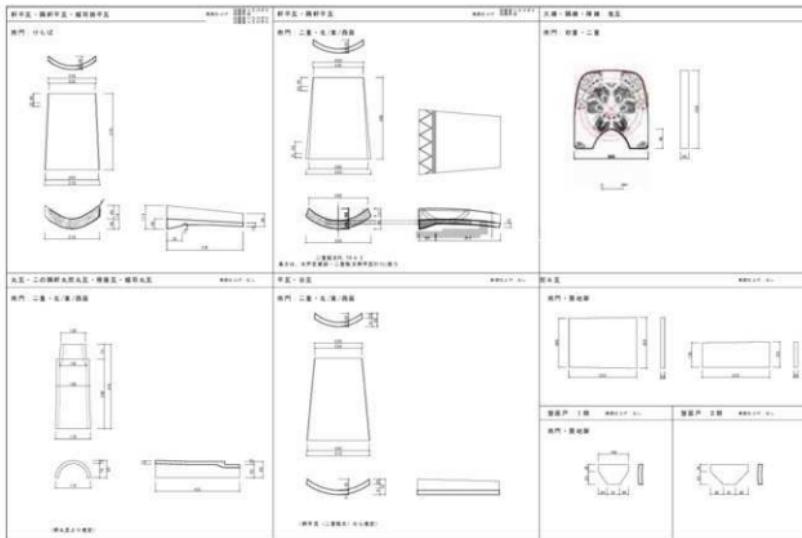
第14図 築地壇 木工事

## 6 屋根工事図

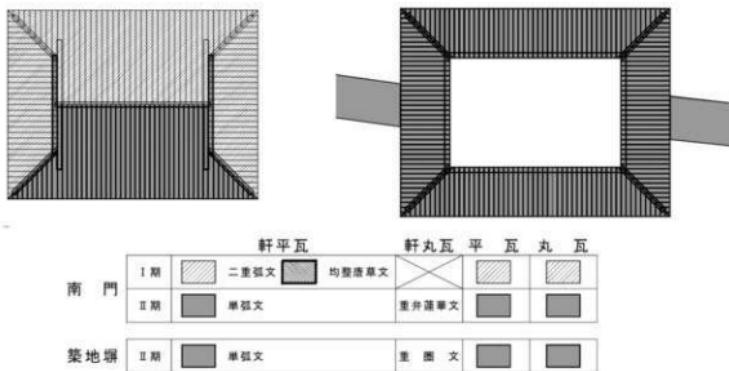
南門及び築地塀屋根に葺く瓦の標準図、数量表である。軒平・軒丸瓦、平・丸瓦、鬼瓦復元図のほか、政庁第Ⅰ・Ⅱ期の瓦葺き分け図が記されている（第15・16図）。

南門地区では、宮城県多賀城跡調査研究所（以下研究所）の発掘調査（第7・48・72・73・87次）で、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、鬼板、熨斗瓦、面戸瓦、隅切瓦など約77,500点の瓦片が出土している。

出土した瓦については、研究所により出土比率や地点別の出土傾向の詳細な分析が行われており（2017宮城県教育委員会 多賀城跡調査研究所）、およそ第1・2表のように整理することができる。



第15図 屋根工事 復元瓦



第16図 屋根工事 時期別瓦葺き

この成果を受け、南門の軒丸瓦には政庁第Ⅱ期の重弁蓮花文（221～228）、軒平瓦には政庁第Ⅰ期の二重弧文（511）と政庁第Ⅱ期の単弧文（640）が併用され、要所で均整唐草文（660）が用いられていたこと、築地塀の軒丸瓦には政庁第Ⅱ期の重圓文（240～243）、軒平瓦には単弧文（640）が用いられていたものと結論するに至ったものである。

なお、鬼板については、小片8点が出土しており、中央に6葉の重弁蓮花文、周囲に連珠と唐草文を配した鬼板に復元されている（分類953）。現時点では他に類例はないものの、復元する南門についても、鬼板953を採用することに決定した。

第1表 出土瓦分類1（軒丸瓦）

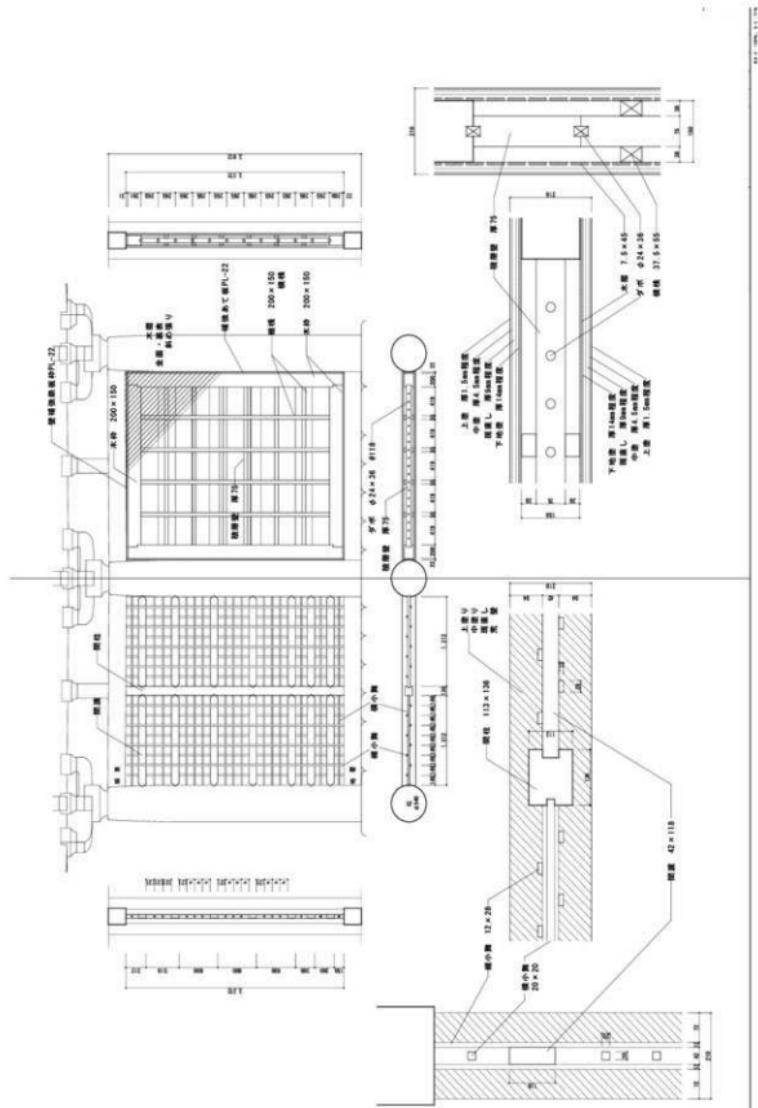
政庁時期	出土瓦分類		
<b>①南門区 68点</b>			
政庁時期	出土瓦分類		
第Ⅰ期	重弁蓮花文(120～134)	4.4%	
第Ⅱ期 (復元時期)	<b>重弁蓮花文(221～228)</b> 重圓文(240～243)	<b>20.6%</b> 20.6%	※築地接続付近に集中
第Ⅲ期	重弁蓮花文(320or431)、細弁蓮花文(311or313)	11.8%	
第Ⅳ期	宝相花文(420)、齒車状文(427)、印刻花文(450～452)	16.2%	
不明	(重弁蓮花文)	26.4%	
<b>②西側築地区 28点</b>			
第Ⅰ期			
第Ⅱ期 (復元時期)	重弁蓮花文(221～228) <b>重圓文(240～243)</b>	25.0% <b>46.4%</b>	
第Ⅲ期	重弁蓮花文(320or431)、細弁蓮花文(311or313)	7.2%	
第Ⅳ期	重弁蓮花文(460)、宝相花文(420or422)、印刻花文(450～452)	10.7%	
不明		10.7%	
<b>③東側築地区 23点</b>			
第Ⅰ期	—	—	
第Ⅱ期 (復元時期)	重弁蓮花文(221～228) <b>重圓文(240～243)</b>	8.7% <b>39.1%</b>	
第Ⅲ期	重弁蓮花文(320or431)、細弁蓮花文(311or313)	13.1%	
第Ⅳ期	齒車状文(427)、印刻花文(450～452)	8.7%	
不明	(重弁蓮花文)	30.4%	

第2表 出土瓦分類2（軒平瓦）

第Ⅰ期	二重弧文(511)	15.0%	
	均整唐草文(660)	6.2%	
	二重 or 三重弧文(511or514)	0.9%	
(復元時期)	偏行唐草文(621)	1.8%	
	<b>單弧文(640)</b>	<b>22.1%</b>	
	無文(641)	4.4%	
第Ⅲ期	單弧 or 無文(640or641)	3.5	
	二重弧文(650)、均整唐草文(720or721A)、鉤齒文(630or632)	14.2%	
	均整唐草文(721AorB)	0.9%	
第Ⅳ期	均整唐草文(721B)、連珠文(831)	5.3%	
不明	(二重弧文)	23.7%	
<b>⑤西側築地区・軒平瓦</b>			
第Ⅰ期	二重弧文(511)、均整唐草文(660)	8.6%	
(復元時期)	偏行唐草文(621)	3.8%	
	<b>單弧文(640)</b>	<b>53.3%</b>	
	無文(641)	2.9%	
第Ⅲ期	二重弧文(710)、均整唐草文(720or721A)	3.8%	
第Ⅲ・Ⅳ期	均整唐草文(721AorB)	2.9%	
第Ⅳ期	均整唐草文(721AorB)	1.0%	
不明	(單弧文・二重弧文)	23.7%	
<b>⑥東側築地区・軒平瓦</b>			
第Ⅰ期	二重弧文(511)、	3.2%	
(復元時期)	偏行唐草文(621)	3.8%	
	<b>單弧文(640)</b>	<b>59.1%</b>	
	無文(641)	4.3%	
第Ⅲ期	單弧 or 無文(640or641)	1.1%	
	二重弧文(650)、均整唐草文(720or721A)	4.3%	
	均整唐草文(721AorB)	1.1%	
第Ⅲ・Ⅳ期	均整唐草文(721B)、連珠文(831)	3.2%	
不明	(均整唐草文・二重弧文)	23.7%	

7 左官工事図

施工区分図、木舞下地・積層下地詳細図、小壁下地詳細図であり、漆喰を施す壁の位置や漆喰塗りの厚さが記されている(第17図)。

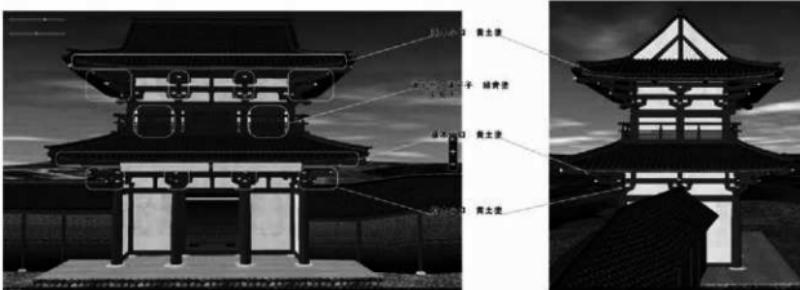


第17圖 左官工事

8 漆装工事図

南門及び築地塀に施す塗装の種類及び数量面積を記した塗装区分図である（第18図）。塗装には、木材塗装の主体となる丹土塗、肘木及び飛檐垂木小口に施される黄土塗、連子窓・連子子に施される緑青塗、天井に施される胡粉塗がある。

このうち、丹土については、政庁地区でから出土した軒平瓦付着赤色顔料の分析をもとに再現することとした。具体にみると、軒平瓦 376 点の内、赤色顔料が付着しているものが 102 点（第Ⅰ期 21 点、第Ⅱ期 74 点、第Ⅲ期 3 点、第Ⅳ期 4 点）認められた。このうち、第Ⅰ期 2 点、第Ⅱ期 5 点、第Ⅲ期 2 点、第Ⅳ期 2 点の計 11 点及び多賀城廃寺跡出土の創建期軒平瓦 2 点について簡易蛍光 X 線分析、さらに顔料の残存状況が良好な政庁第Ⅰ・Ⅱ期の軒平瓦各 1 点については分光光度計による可視光反射スペクトル分析が行われ、いずれも「丹土」と呼ばれるベンガラであることが明らかとなっている（高野芳宏 2008、朽津信明 2008）。南門地区では赤色顔料の存在を示す資料は確認されていないものの、多賀城南門は国府多賀城の正面入口にあたり、政庁南門よりも格式高い二重門形式であったと理解したことを探え、多賀城南門についても丹土塗で復元することに決定したのである。

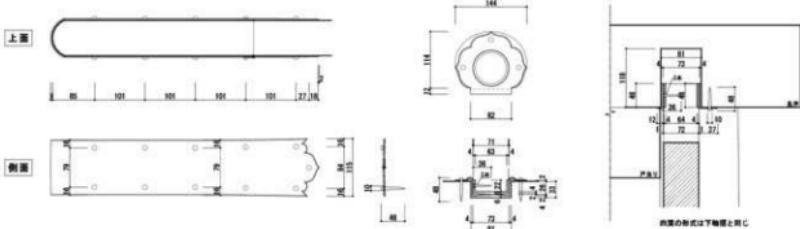


第18図 漆装区分図

9 金物工事図

南門に施す金物の位置図、標準図であり、初重扉の門金具や軸摺金具などの詳細が記されている（第19図）。

南門地区での金属製品の出土は少なく、飾り金具で見れば咀型釘と考えられるものがわずかに認められる程度であるが、国府正面の門であることを考慮し、同時期の資料が数多く出土している平城宮第一次大極殿院建物に倣うこととした。

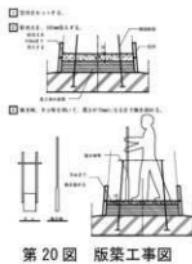


第19図 金物標準図（左：扉八双金具、右：初重扉軸摺金具）

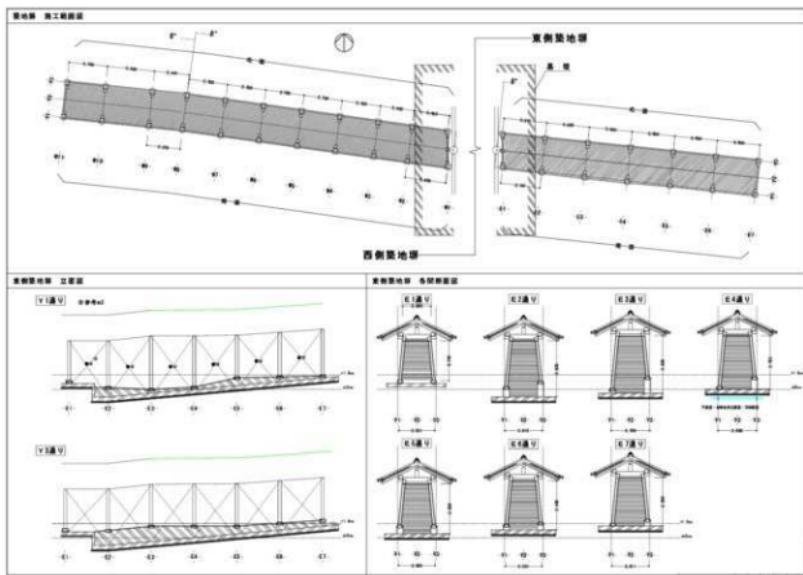
## 10 版築工事

南門東西に構築した築地塀の平面図、東西塀立面図、東西断面図である（第21図）。

築地塀の復元に際しては、現存する築地基底幅2.7m(9尺)を延喜式木工寮で定められた築垣の高さと基底幅の関係（註：基底幅6尺(1.8m)で高さ1丈3尺(3.9m)）に当てはめると、版築の高さだけで5.4mにも達してしまい、南門初重の軒下には收まらず、構造上支障をきたすこととなる。このため、延喜式の例に倣うのではなく、東大寺転害門に取付く築地塀や、平安時代の形式を踏襲していると考える京都御所建礼門に取付く築地塀を参考に、基底幅×1.36を基準に復元することとした。



第20図 版築工事図

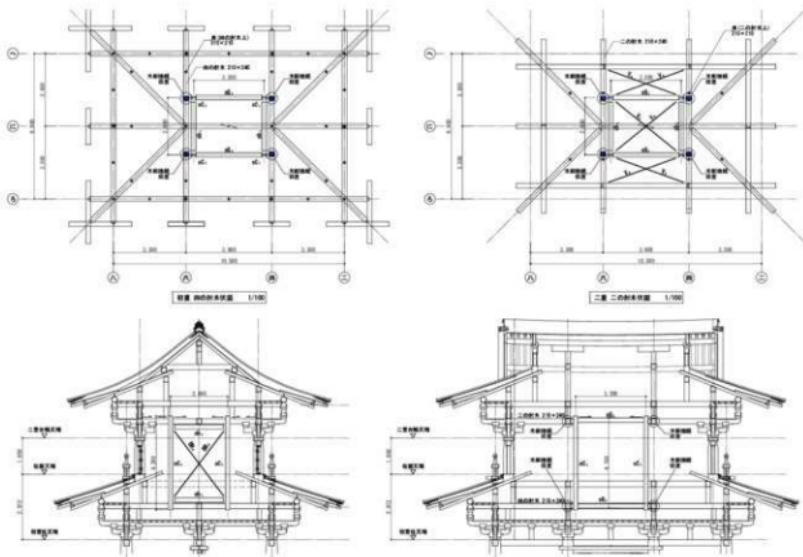


第21図 版築工事図

## 11 構造補強工事

構造概要書、基礎伏図、基礎リスト、鉄筋補強図、二の肘木一四の肘木間補強図、補強金物図であり、水平プレース詳細図や柱脚だぼ補強、垂木留付け要領などが記されている（第22図）。

南門は古代の建築物ではあるものの、建築物として復元し、門として一般の供用に資する上では、現代の建築基準法に合致した仕様が必要である。建築基準法第3条の適用除外を受けることも検討したが、既存の建築物ではないことから、「保存建築物」にも指定することが困難であり、法3条の適用は困難であると判断した。安全性を確保し、長く利活用するためにも、古代には存在しない構造補強を施すこととしたものである。



第22図 構造補強工事図

## 12 仮設工事

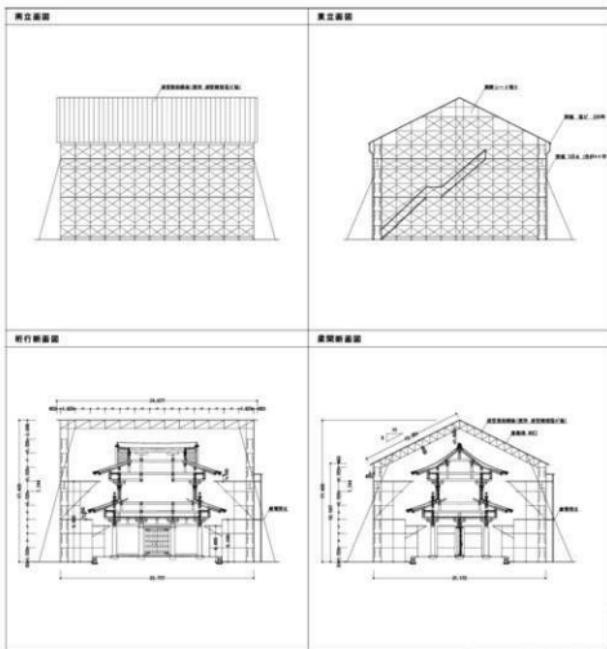
仮設計画図、仮設図であり、仮囲い設置箇所や工事中に南門及び築地塀を覆う素屋根の詳細が記されている（第23・24図）。

南門及び築地塀が位置するのは、政庁から舌状に張出した低丘陵の南端部であり、平坦面がほとんど見られない。このため、仮設の素屋根は工事施工が限可能な最低限の範囲としている。

### おわりに

1970年（昭和45）から始まった多賀城跡の整備事業は、平面的な遺構表示を基本に、宮城県多賀城跡調査研究所により継続的に実施してきた。このうち、南門地区については本市が主体となり、多賀城創建1300年の節目となる2024年（令和6）までに、南門及び築地塀の立体復元や南北大路の整備等を行い、一般公用を開始する計画である。

南門及び築地塀の整備手法については、半世紀以上にわたり進めてきた平面的な整備とは異なり、原寸大での立体復元であり、多賀城跡においては新たな試みである。『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』では、本書第4章(1)ー①に記載のとおり、今後の史跡の活用や管理運営について、地域住民参画による共営のあり方について検討し、持続的な活動の実現を新たな目標に掲げているが、南門地区一帯の復元整備事業は、この共営のあり方に大きな影響を及ぼすと考えられる。



第23図 南門仮設図

#### 参考文献

- 朽津信明「多賀城関連瓦に付着した赤色顔料について」『研究紀要9』東北歴史博物館 2008  
 進藤秋輝『古代東北統治の拠点・多賀城』2010  
 多賀城市・多賀城市教育委員会『特別史跡多賀城跡附寺跡保存管理計画書』1976  
 多賀城市・多賀城市教育委員会『特別史跡多賀城跡附寺跡第2次保存管理計画書』1988  
 多賀城市教育委員会『特別史跡多賀城跡附寺跡第3次保存管理計画』2011  
 高野芳弘「多賀城政庁の建物塗装－赤色顔料付着軒丸瓦から－」『研究紀要9』東北歴史博物館 2008  
 宮城県教育委員会『特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画』2016  
 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 外郭跡I－南門地区－』2017  
 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡年報2014 多賀城跡』2014  
 吉田明弘・鈴木三男「宮城県多賀城跡の高精度植生復元からみた古代の森林伐採と地形形成への影響」『季刊地理学 Vol. 64』2013

---

**多賀城市文化財年報**

—令和2年度—

令和3年12月28日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電話（022）368-0134

発行 多賀城市教育委員会  
多賀城市中央二丁目1番1号  
電話（022）368-1141

印刷 株式会社工陽社  
塩釜市尾島町8番5号  
電話（022）365-1151

---